
ソウル・オブ・カラース

白河黒船

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソウル・オブ・カラーズ

【Nコード】

N8753Z

【作者名】

白河黒船

【あらすじ】

MMORPG『ソウル・オブ・カラーズ』の世界へ突如として囚われてしまった、総勢10001人のプレイヤーたち。ゲームと現実とが奇妙にまじりあったかのように不可解な世界の中で、巻き込まれた中の一人であるアイリは、リンと名乗る少女に危ないところを助けられる。どこかで見覚えのあるような少女の正体を知る間もなく、アイリは過酷な世界で生きていく方法を模索していくのだった。

01 『エンター・ザ・ゲーム』 (前書き)

この物語はフィクションです。

実際の人物、事件、団体等とは一切関係ありません。

01 『エンター・ザ・ゲーム』

草原にいた。

地平線までを見渡せる、広大な平地だ。背の低い雑草が大地を彩るように芽吹き、気持ちのいい風が躍るように身体を通りすぎていく。

そんな草原の中を、ひとりの人間が、全速力で疾走していた。

誰が？

俺が。

一歩足を進めるたび、腰に提げられた短刀ナイフがベルトの金属部にぶつかり、擦れるような音を出す。

一定のリズムで響くそれと呼応するように、くすんだ灰色の外套が風に揺れた。

まるでファンタジー小説の魔術師が着込んでいるローブのように、寂れた長い布の衣装。

今現在の、俺の格好がそれだった。

何この服？

知るか、コスプレとかだろ。

遮蔽物のない草原には、爽やかで心地のいい微風が静かに流れていて、本来ならきつと気持ちのいい風景と思えただろう。

けれど今の俺には、呑気にピクニック気分を堪能する余裕などない。

わからないことだらけだった。

そもそもここはどこなのか。なぜ俺はこんな場所にいるのか。

そんなことすら知り得ぬまま、ただただ走り続けていた。

走り始めて何分経っただろうか。感覚の上では随分走った気がするが、実際は一分どころか、三十秒も経過したか怪しい。

だいたい俺は全力疾走なんて多分、十秒程度しか保たない。はずだ。

年々低下傾向にあるはずの、俺の体力。これほど信用ならないものもない。

「……けど、その割には……っ」

身体が軽い。

羽のように身軽な筋肉。どこまでも走り続けられそうなほど、俺の全身は力に満ち満ちていた。

意外な自分の体力に驚きながら、思う。

だとしても、どうして走らなければならないんだ、と。

答えるだけなら簡単だ。

追われているから。現在進行形で追走されていること以外に理由などない。

何に？

化物に。

「……」

そう バケモノだ。あるいはモンスターと呼ぶべきか。

俺は今、二体のモンスターに追われていた。

だから走っていた。否、逃げていた。全速力で逃走していた。

「……何でだよ……っ！」

背後に意識をやりながら、俺は嘆くように喉を搾る。

数メートル後ろを追いつがってくるモンスター。その見てくれは、

言うなれば、カマキリに近い姿だった。

ただしデカイ。信じがたいほどの巨体だ。体長は、俺の身長を超えるほどに大きい。それだけで既にあり得ない。カマキリ？ これ本当にカマキリか？ こんな生物、俺は知らん。

何より極めつけに最悪なのは、鋭利な輝きを発する二対の鎌だった。

なにせ光っている。銀色に光り輝いている。明らかに金属だった。そんな生物がいてたまるか。

はつきりと言おう。

怖すぎる。

その姿を見た瞬間に悟った。

……これは、ヤバい。

と。

俺は、ほとんど反射で逃げ出した。

背後から聞こえた物音で、カマキリ共が追ってきたことも同時に悟る。

それ以来、止まることもできずに駆け続けた。

どうしてこうなった？

んなこと、わかんねーよ。

そもそも、なぜこんな場所にいるのかもわからないのに。気づいたらここにいて、気づいたと思ったたらバケモノカマキリに追われていた。もうわけがわからない。実際数十秒前までの俺は、半ばパニック状態だった。

しかし人間、その精神構造は存外に凶太いものだったりするのだらう。

ひたすらに走り続けている内、俺は徐々に冷静さを取り戻しつつあった。

「……………」

回り始めた脳を駆使し、俺は自身の状態を確認する。

身体に疲れはない。まだ走っていられる。追ってくるカマキリに對しても、少なくとも速度では勝っていた。追いつかれる心配は、今のところ、ない。

それをいいことに、俺はいくつかの疑問を解決しようと頭を働かせた。

まず問一。

ここは、どこなのか。

結論を言おう。

わからない。

辺りは一面、草ときどき木、といった感じの様相だ。場所を示す手掛かりになりそうなものは何も無い。まさに《草原》。それ以外の何物でもない。

……………そもそもこの場所は日本のどこかなのだろうか？

俺には日本どころか、世界中の何処を探しても、こんな風景に目に出れるとは思えないのだが。

考えたところで、答は出せそうになかった。

よって保留だ。

結論のさせぬ思索に、いつまでも囚われるわけにはいかない。

続いて問二。

なぜ、見も知らぬ草原に俺はいるのか。

これもわからない。先と同様、考えて解を出せる問題でもない。

思う。

最後の記憶は、自宅でネットゲームに興じていたときのものだ。それがあある瞬間でぶつとりと途絶え、気がついたらば草原（さげ）にいた。誘拐とか、拉致とか、少なくともそういった類の何かに巻き込まれたという感じではないと思う。かといって、では何なのかと問われては困るのだが。

考えても埒が明かなそうだ。

では、問三だ。

俺は、これからどうすればいいのか。

そう　問題はそこだ。

結局のところ、諸々の疑問は全て、そこに集約する。

「……………」

実は先程から、俺は頭の中にある仮説を思い描いていた。

突飛で、壮大で、妄想みたいなひとつの仮説。けれど俺は、それ以外の説明を見出すことができそうになかった。

仮説を構成する材料になった要素は三つだ。

まず第一。俺の服装が、いつの間にか変わってしまっていたこと。

第二に、俺を（多分）捕食しようとしている、謎のモンスターの存在。

そして第三に、俺の体力が異様に高いということだ。

「……………もしそうなら」

俺の考えが正しいのであれば。

「俺は　このカマキリを倒せる」

はずだ、と、思う。

というよりも、倒さなければ追いつかれてしまっただろう。
そして追いつかれてしまったては

「ジ・エンドだ」

そうでなくとも、カマキリには翅はねがあるのだから。
脚での競走ならばともかく、

「……おいおい」

背後から羽ばたきの音が聞こえた。

ダメだ、飛行されたら確実に追いつかれてしまっただろう。
もう、賭けに出る以外に生きる道はない。

ならば

「……っ」

俺は一秒だけ逡巡し、

「……!!」

意を決して立ち止り、振り返った。

同時に腰のナイフを抜き放ち、右手で逆手に構える。

二体の巨大カマキリと 目があつた。

「……!!」

瞬間、俺は確信した。

身体の芯から 魂の底から 力が湧いてくるのを自覚する。

勝てる。

俺はナイフの柄を強く握り込んだ。

こんな肉厚の刃物を振り回した経験なんて当然ない。けれどこの
短刀は、まるで十年来の愛刀だともいうように手に馴染む気がし
た。

力を貸してくれよ、と。
掌から繋がる短刀あいはうに、俺は心からの挨拶を送る。

目を見開き、前を見据えた。

恐怖心は否定できない。俺のナイフなど、目の前のカマキリどもの鎌に比べれば酷くちやっちい刃物でしかなかった。

一人の首くらい、簡単に刎ねてしまえそうな鋭い鎌。それはまさしく、死神の鎌に等しいだろう。

けれど、同時に。

俺は言い知れない昂揚を、心のどこかで感じてもいた。

妄想、幻覚、あるいは錯乱。

そうだとしても知ったことか。

ならば、後はそれに、それだけに身を任せればいい。

脳内麻薬、万歳だ！

「行くぜっ！」

心臓の奥底に貼りついた恐怖を、その一声で振り払う。
そして、

「先手必勝　！」

跳び込んだ。

まずは向かって右の敵カマキリ。

狙うは首。反撃を封じるには、一撃で倒すのが一番いい。

爆ぜるように飛び出した俺は、一瞬でカマキリの背後へと回った。
そして振るう。

首の付け根に向かってナイフを振りかぶり

金属音が響いた。

反応された　！？

狙われたカマキリが、振り返るように左の鎌を振るっていた。
防がれる。

二種の刃が、火花を散らし交錯した。
それを、

「お　らアッ！」

俺は強引に力で押し返す。

腕力は、今の俺の方が勝っていた。毀たれた鎌を見る限りでは、
刃の鋭さもだ。

スペックは上。ならば敗北するはずがない。

よろめき蹈躡を踏むカマキリ。俺はその隙だらけの胸の中心に、

「　貫った！」

一撃。

胸の中心を穿つようにナイフを突き刺した。

パキン、

というガラスの割れるような音が響く。

それは、命がゼロに帰した音だ。

カマキリの身体が崩れ、淡い緑色をした光に粒子となって、空気
の中へ融けていく。

その向こう側から、

「　　！！！」

猛るように、憤るように。

もう一体が鎌を振りかぶっていた。

「……！！」

上から下へ、外から内へ。バツ印を刻むように振るわれる二閃。
描かれる十字^{クロス}。

退避は間に合わず、防御は不可能。確実に命を奪いに来る鎌の薙ぎを、

「らあっ!!」

俺は、上へと跳躍することで対応した。

十字が到達するよりも早く、鎌の軌道より上に行く。

身体は横に倒れ、錐揉みするように回転しながら、

「、っ!」

重力に乗って 縦に断つ。

拳を地面に叩きつけるように、俺はナイフをまっすぐに振るった。

一閃、敵の身体を両断する。

パキン、

と、また音が聞こえた。

カマキリが光となり、ふっ、と空気の中へと消えていく。

音が、消えた。

色もまた 同時に、消失する。

それと同時。

俺は、地面に膝をついた。

「勝っ、……たっ!」

のだと、思う。

思うのだけれど、それを意識するより前に、忘れていた恐怖心が胸にぶり返してきていた。

「うわあ……びびったあ……! 超怖かった……!!」

ふう、と荒れた息を整える。

勝てるという確信はあった。でなければ戦わない。戦えない。

だが戦わなければいずれ追いつかれ、あの鎌の餌食となっていた
だろう。

結局のところ、選択肢はひとつだった。

「……とはいえ」

それを理解していたからとはいえ、ならば戦えるかと問われれば、それはまた別の話になる。

そもそも、あんな見るからに怪物じみた怪物を相手にして、まとも戦えるわけがないだろう。だって怖すぎる。俺は殴り合いの喧嘩をした経験すら、片手の指で足りる数なのだから。

「……、……、っ」

俺は息を整えると、ゆっくり立ち上がり、近くに見えた灌木の根元まで向かった。

そこで改めて腰を下ろし、考える。

先程考えていた疑問、その問一。それには答えを出せそうな気がした。

恐らく

「ここ ゲームの中の世界だ」

呟く。

そうとしか考えられなかった。

まったくマンガかアニメの如きシチュエーションだ。とても現実のものだとは考えられない。

けれど同時に夢だとも思えない。

頬に感じる風が、掌で触れる草が、額を流れる汗が。そして何よりも、この肌で感じた強い恐怖の感情が。

全て、紛うことのないリアルさを持っていた。

「まあ、夢なら夢で、そのほうがいいんだけど……」
よもやそんな展開オチでもあるまい。

夢なら既に醒めているだろう。

これは、紛うことなき現実だ。

「……………」

なぜ、そんな発想に至ったのか。

初めに違和感を覚えたのは服装だった。

記憶の限りでは、俺はヴィンテージでもないのに色の薄れたジーンズと、一枚千円のダサい白のTシャツを着ていたはずだ。

仮にそれが記憶違いだったとしても。

それでも絶対に自分の服では有り得ないと言い切れる格好を、今の俺はしているのだった。

どんな格好か。

皮の鎧……とでも言えばいいのだろうか。RPGのキャラクターが装備していそうな、胸当てのついた茶色の防具(?)に、くすんだ灰色の布のズボン、上からそれと近い色合いのローブだかマントだか……、そんな感じの格好だ。

なんとというか、いかにもファンタジーの世界に出てきそうな見た目になってる。

世間的には、それを指して“コスプレ”と言うのだろうか……生憎と、俺にコスプレの趣味はない。そもそもこんな服は所持すらしていないだろう。

それでも俺は今、自分がしている服装　あるいは装備と言うべきか　に覚えがあった。

この場所へ来る前の最後の記憶。

自室でプレイしていた、とあるオンラインゲーム。

『ソウル・オブ・カラーズ』。

通称をSOCというこのゲームは、いわゆるMMORPG　多人数同時参加型オンラインゲームだ。その奥深いゲーム性、特に自由度の高い　高すぎるとさえ言えるような　キャラクター成長

の幅を最大の特徴としている。さらに広大かつ詳細な世界観と美麗なグラフィックも相まって、瞬く間に年齢性別を問わない人気を獲得した、と言われている。

そう、

今の俺の姿は、このゲームで俺が育てたキャラクターと、ほとんど同じだったというわけだ。俺はそれに気づいていた。

無論、自分が着ている以上その全体を見ることはできないが、それでもはつきりとわかった。

これは、ゲームの中の自分の姿だ。

そして、それに気がついたことで、連鎖的にもうひとつ別の事実にも俺は思い至っている。

先程のカマキリ型モンスターにも、俺は見覚えがあった、ということにだ。

SOCは画質のリアルさも売りのひとつであるが、それでもゲームと現実には差異がある。さすがに実写そのものとまでは言えない。それゆえに見落としていたのが……。

先程のカマキリ。

アレとよく似た雑魚モンスターが、SOCにも存在していた。

考える度に冷静さが増し、俺は連鎖的に様々なコことを悟っていた。

まずは周囲の草原。SOCにも、確かにそのまま、《草原》というフィールドが存在する。

そしてより重要に思えたのは、全力疾走を続けても自分が疲れない理由だった。

考えてみれば、体力だけでなく、速度自体も普段の自分より幾分上がっている気がした。まるで自分の身体ではないようだ。肉体が思い通りに動く。その言葉の意味を、俺は生まれて初めて知った。

気分だった。

そして。

決定的だったのは、ステータスの閲覧ができたことだ。よくよく意識を凝らしてみると、頭の中に、自分のステータスやHPゲージが見えてきたのだ。

実際に視界に映る訳ではない。それで『見える』とは妙な表現だが、それでも俺には、他に表現のしようがない。とにかく『見える』。

Name : アイリ

Level : 100

Color : 灰【Gray】

とか。そんな情報を、脳裏で閲覧することができた。それで、思う。

恐らく今の自分の体には、ゲームのステータスが反映されているのではないかと。それで身体能力が上昇しているのだと。

俺はそう、確信するに至った。

ゲームの中での自分なら、あのモンスターに勝てるはずだ。あのカマキリ型モンスターのレベルは、記憶の中では高くても30ちよつとだったはず。自分の自分がゲームで育てたキャラクターのレベルならば、ステータス的にまず間違いなく負けない。

そう思って振り返り、カマキリの姿を見れば、頭の中に敵のHPやレベルが見えてきた。

それが、最後の後押しだった。

倒せる。

そう確信した。

……気づけば俺は、何かに突き動かされるようにナイフを抜いていた。

この程度の当て推量に、自分の命まで懸けるなんてあり得ない。普段の自分ならそう思っただろう。

けれど、このときの俺にそんな考えはなかった。ただただ確信していた。

俺はこのカマキリを倒せると。

なぜかそう、信じきってしまった。

「俺って、そんなに好戦的だったかなあ……」

わからないが、まあ、実際勝つたのだから良しとしよう。……うん。

それよりも今考えるべきは、

「俺、これからどうしようかなあ……」

と、いうコトなのだから。

01 『エンター・ザ・ゲーム』（後書き）

用語集

the Soul of Colors【ゲームタイトル】
色、という概念を軸に添えた人気MMORPG。略称はSOC。
和・洋・中ないまぜにしたような世界観は賛否両論だが、その節操のなさが実現した美麗なグラフィックや街の外観が、若年層や女性客に意外と受けた、とか何とか。

スラッシュマンティス【モンスター】

カマキリを模した巨大な虫系モンスター。レベルは30〜50ほど。

両手のカマは金属であり、プレイヤーの武器とも切り結べるほどの硬度を持つ。また巨体の割に素早く、また背中 of 翅を使って短時間の飛行も可能。

入手できる素材は《鉄のカマ》、《虫の翅》など。

02 『現状確認』（前書き）

あとがきに載せる用語集はおまけなので、読む必要は基本的にありません。

興味がある方のみどうぞ。

02 『現状確認』

しばしの休息を経た俺は、広大な草原の中を歩き始めていた。辺りは一面、短い草の茂った平地だ。ところどころ背の低い木や土がむき出しになった地面も見つけられるが、基本的にはどの方角も同じような景色しか広がっていない。

それは確かに、俺がSOCで見慣れた《草原》の光景だった。ただし、違いがないわけではない。たとえばゲームのフィールドには、これ以上は進めない、という見えない壁のような境界があった。それがなければ無限にフィールドが続いてしまうため、ゲームとして考えるならば当然の要素なのだが、その限界地点が、今は、ない。

驚くほど広い大自然。道と呼べる道が獣道すらなく、どちらへ進めば街へ。この場合の『街』とは、ゲームでいうプレイヤータウンのことだが、着くのか、周囲の風景からは判断できない。

が、

「地図マップが見られたのはラッキーだった……」

先の休憩時間に確認した諸々。

たとえば、ゲーム時代には見られた、いわゆるステータス画面。念じれば頭の中で見ることが可能なそれは、ゲームのときとほとんど変わらない感覚で利用可能だった。敵や自分のHPなどを確認するときと変わらない。視覚ではなく、感覚で情報を閲覧することができる。同様に地図や方位、ついでに時間なんかも視界の隅で確認可能だ。

「なんとというか、便利だよなあ……」
とは、思った。

妙にご都合主義っぽくて、なんだか少し醒めるような気がする。

「……意外と冷静だな、俺」

ゲームの中に入ってしまった、だなんて。そんな空想を、ファンタジーこうも簡単に受け入れられるとは、我ながら存外に凶太いというか何というか。

「もしくは、何も考えてないだけなのかね」

だが少なくとも、俺は今、自分がネットゲームの中に SOC の中に入り込んでしまっている、という部分を疑う考えはなくしていた。

なにせ一致する要素が多すぎる。その前提を無視するほうが、むしろ現実を見ていないと思う。

「……まあ、どうであれ、とりあえずは人間を見つけないとな」
歩きながら俺は考える。

探せば俺と同じ境遇の人間が、恐らくどこかにはいるはずだ。なんていうか、そう、このテの物語の王道というか、パターンとしてはそうだろう。

あるいは俺だけが巻き込まれたのかもしれないが、その思考は恐怖を招く。少なくとも今は、他に人間がいると考えて行動したかった。

俺とて男だ。ガキの頃に憧れた物語の主人公のような境遇に、心が躍らないと言えは嘘になる。

けれど同時に、もう少年とは呼べないくらいには歳を重ねた俺にとって、“冒険”という言葉の輝きは、幼いときに比べて随分と減少してしまった。

現実、と。皆がそう呼ぶ世界のことを、俺は考えないわけにはいかない。

だからこそ俺は、まず人が集まりそうな街を目指した。

このSOCというゲームには、まともなプレイヤータウンは、な

んと一カ所しかない。MMORPGにはあるまじき設定だが、そんなのだから仕方がない。

プレイヤーはその“街”から様々なフィールドに繰り出して行き、冒険が終わればまた“街”へと戻ってくる。フィールド自体は出現する敵モンスターの強さ（レベル）によっていくつかの層と、更に小さい区分である区エリアに分かれているのだが、街へ瞬間移動できる《転移晶石》という魔法の石みたいなモノが、どの層ゾーンにも設置してあるはずだ。

マップによれば、現在位置は《草原フィールド・第三ゾーン・第七エリア》ということになる。

ゲームでは遙か昔に踏破した低レベルフィールドだが、それ故にマップピングも済んでいるので、転移晶石の位置は把握している。

現在位置も、結晶の位置も知らせてくれる便利すぎな脳内マップのナビゲーションに従って、俺は草原をひた歩いた。

「それにしても、エリアのひとつひとつが、なんかゲームのときより広くなってる気がする……」

画面の中を俯瞰するのと、自身の目で見回すことによる感覚の差だろうか。それとも実際に広さが変わっているのか。

ともかく俺は、広い草原を歩き続けた。

時折、先程のカマキリや、加えて毒々しい体色のデカイヘビっぽいヤツとか、身のよだつような口臭を撒き散らす醜悪な顔のオオカミっぽいヤツとか……、なんだか妙なトラウマを俺に植えつけようとしているかの如きモンスターたちが襲いかかってきたものの、どれも簡単に撃退できた。

カマキリやヘビやオオカミに見えるけれど、でも確実に違う何か。現実世界には絶対に存在していないだろうモンスター。

抵抗なく攻撃できるのは、それが理由なのかもしれない。

遭遇率エンカウントはそう高くない。これは、あまりにもレベル差があるとモ

ンスターが現れにくくなるという、S O Cのゲーム的な仕様ゆえだと思われる。

また、あまり威力の高い方ではない俺のナイフだが、恐らくレベル差のためだろう、どのモンスターも大抵は一撃でHPをゼロにできた。

それに、単純な身体能力だけじゃない。体力や動体視力、反射神経まで向上している。

もはや負ける気がしなかった。

そんな諸々が、俺の中の危機感をどんどんと減少させていく。

「こついうのを、ゲーム脳って言うのかね……」

なんて、そんなことを独りごちる余裕まで生まれてきた。

まあ、テレビで識者とやらが語るような、根拠のない評論に興味はないが。

ともあれ余裕が出てくると、今度はいろいろなことを試してみたくなるのがゲーム脳（かっこわあひ）（笑）というものだ。

たとえば《スキル技》。

大方のM M O R P Gよろしく、このS O Cでもいろいろなワザを習得していくことができる。

習得したスキルは、基本的にS P（ソウルポイント）と呼ばれる数値（まあ要するに、MPみたいなモノだ）を消費することで使用できる。

たとえば、

「《灰空牙》！」

という技は、武器の先端からカマイタチのような衝撃波を発射する遠距離技だ。

大した威力のあるスキルではないが、それでもこのフィールドのモンスターであれば、遠巻きから安全に狩ることができる。

……いや、別に技名を叫ぶ必要はないのだが、そこは気分だ。少し恥ずかしいというか、傍目にはイタい感じではあるけれど、周り

に誰もいないのだから気にすることはない。気にしない。

それに、

振ったナイフの先から、カッターのような衝撃波が飛び出したときの興奮は、言葉じゃ表せないものがあった。

魔法を使って攻撃。

男の子永遠の憧れと言っていていいだろう。これには感動せざるを得ないと思う。技名だつて叫びたくなるというものだ。

まあ、S O Cの設定的には、このスキルは“魔法”というわけではないのだが、結果的には似たようなものだろう。その程度で褪せる感動ではない。

俺のテンションは一気に上昇した。

上がったテンションに任せて次に試したが、果たしてモンスターの攻撃を受けたらどうなるのか、ということだ。

それまでは、モンスターからの攻撃は全て回避していた。だが、いつまでもそれが出来るとは限らない。このS O Cには、ときどきゾーンのレベル帯を超越した強さのレアモンスターが、ぽつと湧いて出ることもあるのだから。いざというときは考えておく必要があるだろう。

だが正直言つて、これは熱にでも浮かされていないと試す気になれない。

……というか。

正直、最初の一戦は、自分でもどうかしていたように思う。頭がオーバーヒートしていた。

よくもあんなおつそろしいモンスターに向かって行く気になったものだ、我ながら。

さておき、被ダメージの調査だ。

恐らくHPが減るだけで、きつと俺自身が傷ついたりとかはしな

いと思うのだ。というかそうであってほしい頼むから。

だって怖えし。

少なくとも、あのカマキリの鎌で試す気には到底ならない。

ていうか、いくらモンスターとはいええ、もうちよっと可愛げのある見た目であれよ、なんて思う。

……まあもつとも、あまり可愛げがあり過ぎると、今度は攻撃がしづらくなるのだが。

実際、歩いている内に遭遇したウサギに似たモンスターには、なんとなく抵抗があつて攻撃できなかった。倒しても 殺しても

その死骸は残らず、ファンタジーな感じで光となって消え去るだけなのだが、やはりゲームとは違い、自分の手で凶器を振るわなければならぬという事実は、少なくとも心理的抵抗を生む。

幸いそのウサギ(のような何か)は非アクティブ型の 能動的にプレイヤーを襲つてこないタイプのモンスターだったので、何もせずに通り過ぎたが。

俺はモンスターの中でも、比較的安全(?) 那样的オオカミ型のモンスターを実験の対象にした。

だが《噛みつき》攻撃はヴィジュアル的に怖い。鋭いのは何かイヤだ。ここは、距離が離れると使ってくる《突進》攻撃を受けてみようと思う。

そう考え、俺はオオカミ(的な何か)と相対した。

やはり試すには、無抵抗で攻撃を受けるのが一番ベターだろう。

……これだけのレベル差ならば問題ない、大したダメージにはならない。

そう自分に言い聞かせる。

勢いよく突っ込んで来るモンスター。

ヒトを跳ね飛ばさんとばかりの速度で、まともを受けたら骨折は必至だろう。

そんな攻撃に対し、俺は「バツチ来い！」とばかりに両手を広げ、

「あ、やっぱり怖えっ！」

結局、腕を使って防御の構えを取りつつ、敵の攻撃を受けた。

ずしりと、弱く鈍い、しかし重みのある痛みが腕に響いた。だが撥ね飛ばされるほどではない。僅かばかり押されてノックバックしたものの、そこで耐え切った。

痛みは、ある。

でも大したモノじゃない。

脳の片隅に知覚できる自分のHPが、本当に少しだけ、ちびっと減少するのがわかった。

それを見てから、俺はカウンターを行うように、敵の眉間へとナイフを突き立てる。

肉を抉るような感触じゃない。本当にゲーム的な、紙風船でも突いているかのような手応えのなさ。

それでも効果があるのは事実だ。一撃でHPを消し飛ばされたモンスターが、光の粒子となって霧散する。

呆気ない終わり方だった。

まだ数体残っていたモンスターを、今度は素早く倒し切り、俺は自身の身体を確認する。

攻撃を受けた両の腕には、少しばかりの痺れを感じていた。

「……多少の痛みはある、か」

それがわかったただけでも収穫だろう。

さすがに

HPがゼロになったらどうなるのか。

という、疑問。そこまでを試す気にはなれなかった。

ゲームでは街の神殿で復活できたが……

「こういう展開の王道を考えると、さすがに悪い想像ができるよな……」

というか、悪い想像しかできない。

念のため。

俺は脳内に見えるアイテム欄から、回復のための薬を取り出して使用した。

ダメージ量と回復量の比率を考えると、かなり勿体ない使い方ではあるが、ケチる気にはならなかった。

……これで、アイテムが使えることまで証明された訳だ。自分の中のどこかにある冷静な部分が、そんなことを考えていた。使うときだけ手の中に現れるとは、本当に、都合のよすぎる便利さだとは思っけれど。

……とまあ、そんな感じで。

俺は思いつく限りのことを、試し試しに歩いた。

時間にしたら……それでも三十分くらいか。結構な距離を進んだ気はするが、肉体的な疲労はまるで感じていない。

便利なものだ、と。

現状へ既に適応した思考が、他人事のようにそんなことを思う。

「……………」
それにしても。

なんというか、いまいちゲームの中だとは思いつらい場所だった。デジタルな感覚はまるでなく、地球のどこかだとはあまり思えない

が、かといってVRの世界だとも思えない。

ヴァーチャルリアリティ

嫌悪感を喚起するモンスターたちとは違い、周囲の景色は驚くほど美しいものだった。少なくとも、僕が今までの人生で眺めてきた様々な光景の中では一番だろう。まあ、大して旅行をした経験もなし。そもそも心を強く打つような絶景など、テレビの向こう側の話でしかなかったが。

それを抜きにしても、眼前に広がる草原には息を吞まされる。

360度どこを見渡しても、地平線まで続く新緑の絨毯。ゲームの中だと思わせるような、ヴァーチャルな感覚は微塵もない。吹き抜ける薫風も、微かに漂う草の香りも、全てが現実のそれよりリアルにすら感じられた。

「なんか、気分のいい場所だよなあ……」

どちらかといえばインドア派の俺でさえ、弁当持ってピクニックにでも来たいと思えるほどだ。もっとも、モンスターさえ出なければ、だが。

それは、ゲーム時代には思い浮かべることすらなかった思考だ。いくら最近のゲームがハイクオリティとはいえ、さすがに自分の眼で目の当たりにするのでは差がありすぎる。

まあ、それ以前に、本来的に“戦闘”という行為が活動の軸になるゲームにおいて、暢気にピクニックして遊ぼうなどと考えること自体まずないが。そんな暇があったら狩りをしている。

「
」
思う。

やはり、『ゲームの中に入り込んだ』というよりは、そう、『異世界に飛ばされた』とでも考える方が、感覚的にはしっくりくる。

「いや、主観的にはどっちも変わらないんだけど」

むしろ、脳内に見える地図やステータス画面なんかは、ひどくゲーム的であるけれど。

それでも。

まるでファンタジー小説の主人公にでもなった気分だ。得た能力ちからは、伝説の聖剣の代わりに、ゲームのスキルだったという感じで。

……もつとも、実際にはそんな悠長な妄想に浸っている場合では決してないのだろうが。

「まあ、これはこれで、浮かれるなって方が無理なシチュエーションだと思っただよなあ……」

これから先に、ファンタジーな冒険が待ち受けているのではないか。

なんて、我ながら子供じみた想いが胸を占めている。

果たして、この状況。

まともな人間なら、絶望するのだろうか。

それとも、誰しも存外、歓迎するのだろうか。

どちらも正しい気がするし、どちらもズレているような気がした。

「……ま」

とりあえず。

大学の出席やバイトのシフトについては……、うん。考えないでおこうと思っけれど。

いや本当、どうしようね。

「……」

している内に、ようやく目的地が近づいてきた。

少し先に、淡い緑色に輝く、直径50センチはあるつかという大きな水晶球が見える。

ゲーム内での名称を言えば、《ゲートクリスタル転移晶石》。たとえ未プレイでも、

大方の人は名前で察せられるだろう単純なネーミング。要するに、ワープが出来る魔法の石、といったところだ。

プレイヤータウンへは、各エリアに点在する、この転移晶石を使って帰還する。

逆を言えば、この石を使わなければ、街へは戻れない訳だが。

「……、ん？」

そのときだった。

転移晶石のすぐ近くに、俺はふたつの人影を目に捉えた。

それは、

「……！」

人影。

そう、人影である。

俺は初めて、自分以外のプレイヤーを見つけたのだ。

仲間がいた！

と、咄嗟に思った。

先の虫や獣カマキリオオカミのようなモンスターではない。無論、亜人タイプのモンスターとも違う。

それは確かに、自分と同じ人間のプレイヤーだった。

少なくとも、そう、見えた。

02 『現状確認』（後書き）

用語集

ステージ【ステージ】

SOCにおける基本的な戦闘区域。要するにモンスターが出現する所。

全部で10のステージがあり、それが幾つかのゾーンに区分され、さらにエリアで細かく分けられている。

ステージ>ゾーン>エリア、である。

ステージはいくつかのフィールドに別れることがある。

また、ダンジョン、といった場合は特別に区切られた閉鎖空間を示す。その場合の広さは数エリア〜1ゾーン丸々全て、までまちまちといったところ。特定の場所にぽつんと遺跡があったり、イベントで加えられたりする。

「わかりづれーよ！」と初心者には不評だが、なんだかんだで大抵すぐ慣れる。

灰空牙【スキル】

灰色属性の遠距離攻撃技。

自身の武器から衝撃波を繰り出すスキル。持ち武器が弓などの遠距離武器の場合は、実質的に死に技と化す。

低コスト、低威力の、いわば牽制技である。

余談だがSOCに遠距離攻撃スキルはかなり少ない。レアである。

SP【ステータス】

HPと並んでゲージ表示されるステータス。数値を消費することでスキルを発動させる。

まあ、要するにMPですよ。

そこにいたのは、二人組の男だった。

片方は重めの鎧を着込んだ槍使い、対してもう一人は比較的軽めの装備の片手剣士だ。

「さすがにゲームよりはリアル……っていつか、普通の人間に見えるよなあ」

そういえば、今の自分はどんな顔をしているのだろう。

ゲームアバターの顔なのか、それとも実際の自分の顔なのか。

「ま、それは後で確認するとして……」

俺はもう一度、前方の二人を眺める。

「色は、……黄色と赤かな。わからないけど」

遠目に見ながら、なんとなくて呟いた。

《色》、とはSOCにおける、いわゆる職業ジョブのことだ。

大方のMMORPGと同じく、SOCでもゲーム開始時のキャラクターメイキングで、いくつかある選択肢の中から好みの職業……ならぬ色業を決めることになる。

色は全十色。それぞれの差は、基礎ステータスと覚えられる技スキルの幅だ。

もつとも獲得したポイントを振り分けることで、ある程度は任意のステータス成長が可能だし、武器や防具の選択も色にかかわらず自由だ。同色だからといって、同一の戦い方をするとは限らない。もちろん幾つかのパターンというか、育成の定石みたいなモノは存在する。相手がどの色に属するかを見破る楽しみも、SOCでの戦闘における醍醐味のひとつだろう。

ちなみに俺の色は《灰》。他色に比べ圧倒的に多いスキル数と、絶望的に低いステータス平均値が特徴の、なかなかピーキーな色である。まともなのはSPの数値くらいのものだ。

器用なので、それでも単体生存能力は高い色である。
ただし器用貧乏なので、パーティで重宝されることがほとんどない。

「……」

さておき。

俺は二人組の男に近づいて行った。

俺と同じく、今いきなりこの世界に飛ばされたのか。それとも何かを知っているのか。

どうであれ情報交換くらいのはできるだろうと、そう思った。

「あの、……すみませーん！」

声をかける。

二人の男が、首だけでこちらに向き直った。

ゲームにも一応、マイクを通じて行えるボイスチャットの機能はあったが、さすがにこう、フィールドのど真ん中で突然叫ぶような真似はあまりしない。

そんなところもゲームとは違うよな、などと思いながら、俺は更に言葉を重ねようと口を開き、

「あの えっと」

そこで言葉に詰まった。

さて、一体何を言ったらいいものか。というか、なんといいのだろう、というか。

自分以外の人間を見つけたことに舞い上がって、不覚にもそれを考えていなかった。

……とりあえず、こちらから質問をさせてもらおうか。

そう思い俺は、

「すみません、ちょっと訊きたいことがあるんですけど
と。」

そう口にして。

そこで初めて、彼らが武器を抜いていることに気がついた。

「……え、」

間抜けな声が 否、間抜けな音が、喉の奥から零れ出た。意味を持たない呼気の塊が、意味もないまま大気へ溶ける。

そして。

その瞬間には既に、男の片方 槍を持った方がこちらへ飛び出て来ていた。

着込んだ鎧の重さを感じさせない、稲妻のように素早い一撃。

気づいたときには、槍の穂先はもう目と鼻の先で。

襲われる意味など何一つ判らないまま俺は、

「 つ！？ 」

ほとんど反射的に、俺は地面へ倒れ込むように身を捻っていた。

瞬き一つ分だけ遅れて、それまで俺の上半身が存在した空間を刃が通過するのがわかる。

躲した。

それを理解する。

そして躲したことを理解して初めて、俺は自分が躲さなければならぬような攻撃を受けている、ということに思い至った。

「 なっ 」

わけがわからない。

わけがわからないまま、ただ顔面と地面の距離が徐々に近づいていく。

咄嗟の回避で、身体のバランスが崩れてしまっていた。

「 くっ 」

腕を使って転倒の衝撃を殺す。

それは、どうしようもない隙だった。

頭のどこかに潜む冷静な自分が叫ぶ。

追撃が来る！

もはや男の姿を確認している暇はない。俺はそのまま、突いた腕の力だけで強引に、転がるように襲撃者から距離を取った。

一刹那の後、槍の柄が風を切る音が聞こえた気がした。

地面を転がりながら、俺は身体をバネに見立てるように跳ね上げ、無理やり体勢を立て直す。その流れで、腰からナイフを抜き取った。

自分の動きに自分で驚きつつ、起き上がる。

二度目の追撃はない。

突如強襲してきた男は、無感情な、ただ相互の間に開いた距離を測っているだけのような瞳でこちらを見るともなく見ている。

「……いつたい」

何が、どうなっているのか。

自分でもわからない。

男が襲ってきた理由もわからないし、何よりそれに自分が対応できた理由が理解できない。自身が持つ奇妙なまでの冷静さが、自分で一番、不気味に思える。

まるで予定調和の劇を演じたような気分だ。

いや、違うか。

正確には人形劇だ。

自分の身体が、舞台の外から糸で操られているような。そんな気分がした。

「……まあ、構わない。それで助かったのだから。文句も不満もありはしない。」

例えば、モンスターと戦っているときから、どこか自分はおかしかった。

身体能力が上がっているだけじゃない。戦う、という行為自体に対する反射や思考が、普段の自分からは考えられないようなレベル

に至っている。

自分が自分でないようで、あまりいい気分とは言えなかった。

「いや。今はそれどころじゃない、か」

まずは目の前の襲撃者をどうにかしなければならぬ。

「……PK、ね……。つたく、ホントに死んだらどう責任とってくれんだよ……」

PK。

プレイヤーキラー。

プレイヤーがプレイヤーを殺すこと。

MMORPGではそう珍しい概念ではないだろう。SOCでも、場所にはよるが、可能な行為に含まれている。

もつともあまり褒められた行為でないことも事実だが、多様なオンラインゲームのプレイヤーの中には、当然PK行為をプレイの軸に据える者だって存在するわけで。

フィールドでいきなり殺される可能性は、“ゲーム”において、決してゼロではない。

そんな当然のことも、俺の頭からは抜け落ちていたらしい。

「いきなり襲ってくるとは、なかなかご挨拶だな、オッサン」

油断なくナイフを構えつつ、俺は言った。

口調は半分くらい挑発のつもりで荒くしているが、もう半分は素が出たようなものだ。

さすがに、いきなり刃物を向けられてはいい気分がしない。

「あー……っと、別に争うつもりはなかったんだけどなあ。少しばかり話を聞きたいだけだったんだけど、嫌なら諦めて、街で他の人を捜すよ。だからそこ、通してくれないかな」

「……」

果たして。

返答は なかった。

男はまるで感情らしきものを発さず、ただ決められた作業だからとでもいうように槍を構えた。

その肩越しに、相棒らしき男が剣を持って向かって来るのも見えた。

「問答無用かよ……」

呟きながら、しかし違和感を感じる。

その感覚を、果たしてどのように言語化すれば伝わるだろうか。考えている暇はなかった。

先に来たのは槍の方だ。穂先をまつすぐこちらを向け、突撃兵よろしく猛進してくる。

けれど、

「同じ手が二度も効くか　！」

叫び、俺も敢えて前へ走り出した。

単調なその突進を、くぐり抜けるように躲す。長柄の武器は、そのリーチが長所にも弱点にもなり得るのだから。

一気に懷まで潜り込んだ俺は、そのまま相手の勢いすら利用するように、カウンターとしての一撃を相手の胸へと叩き込んだ。

「ぐっ……！！」

だが　硬い。

刃は胸当てに阻まれ、硬質な金属音を打ちならした。

かなりランクの高い鎧らしい。通常攻撃でまともなダメージを与えないのは難しそうだ。

……平気で突進して来れるのは、この防御力があるからか……！
今更ながらに俺は悟る。その間に、

「、っ！」

相手の槍が引き戻されていくのがわかった。　二撃目が来る。

まともな近接では分が悪いだろう。

槍が引き戻されるより早く、俺は腕へと思いつ切り体重を乗せ、相手を押し倒すように力を込めた。体勢を崩すことで槍の動きを止

めようと狙う。

だが相手もさるもの。先までの低レベルなモンスターとは次元が違った。

男は、身を強引に打ち倒そうとする俺の力を、逆らわずに受け流すことでいなす。

押され半身になった男は、それによって回転の力を身体に得ることになる。

やばい……！！

と、思う頃には遅かった。

引き戻された槍が、その終端で再び勢いを獲得し、

「！！」

突きではなく、薙ぐような払いが、左側から俺の身体に叩きつけられた。

「ず あ」

咄嗟にナイフでガードするが、速度重視の軽装である俺では防御力が足りない。

俺は右足で、思いつ切り地面を踏み抜いた。

だがそれは、堪えるには足りない力だった。なんとか直撃は免れたものの、恐らく筋力パラメーターでも敗北していたのだろう。俺は押し負け、強く吹き飛ばされる。

HPの数パーセントを削られたことが、脳の片隅で理解できていた。

だが。

攻撃は、まだ終わっていない。

敵は一人ではないのだから。

「」

視界の端で剣士の方が、小声で何かを呟いてのが辛うじてわかった。

遠く、遙か間合いの外にいるはずの剣士。その剣の先から、しかし、青白い光がスパークするのが見て取れた。

瞬間、切っ先から何かが飛来する。

生み出された攻撃は衝撃波となり、槍ですら及ばぬ間合いの外から、こちらを正確に狙い撃つ。

脇腹に直撃した。

「が、っは」

血を、吐いたと思った。

実際に漏れたのは空気だけ。だが鈍い痛みが臓物を大きく響かせる。衝撃は内臓にまで直に伝わり、肺の奥から一気に空気を押し出していた。

槍に吹き飛ばされていた俺の身体は、衝撃波によって更に軌道を変えられる。俺は受け身すら取れずに背中から地面へと墜落した。

それでも、

それでも俺は、あえてニヤリと、笑ってみせた。

まるで感情の片鱗を見せない二人の男を、嘲笑うように口角を歪める。

次の瞬間、槍の男の足許から、猛烈な勢いで草が伸びあがり、まるで縄で縛り上げるように男の脚へと絡みつく。

「

その一瞬、俺は男の顔に、驚きの表情を見た気がした。

だがそれも、激しく成長する鳶の動きに固められていく。

灰属性のスキル 《鳶縛り》。

罨のように設置できるタイプのスキルであり、名前通りに鳶が対

象の身体を絡め取り、短い時間だが移動を阻害することができる、使いどころを見定めればなかなか有用なスキルだ。

……俺とて何も、わざわざ無為に吹き飛ばされたわけではない。槍を避けきれないと理解した瞬間に、畏を残していくぐらいのこととはやっておいた。

《火山》なんかの草木が生えにくいフィールドだとほとんど使えないスキル（SOCのスキルは、総じて結構、フィールドの影響を受ける）ではあるが、ここは《草原》フィールド。使用に支障はない。

そして、
俺は駆け出した。目指すは剣使い　の先にある街への転移晶石だ。

そう、別に倒す必要はない。というか、いくら襲われたとはいえ、さすがに人間を攻撃するのは気が咎める。ましてHPをゼロにしてしまおうなどは考えられない。

ならば、要は逃げてしまえばいいのだ。
SOCでは、ある特定の条件を除けば、街の中では一切の攻撃手段が使用不可能になっている。その仕様が今なお適用されている保証などどこにもないが、ここで2対1のまま戦い抜くよりは、街の中へ逃亡するほうが遥かに楽に違いない。

遠距離技を使用した剣士へと距離を詰めていく。

剣を持っていながら、わざわざ遠くからの射撃を選んだのだ。恐らく、近接戦闘の技能スキルはそう高くあるまい。少なくとも、捕縛した槍使いよりは下のはずだ。

ならば逃げ切れる。

俺は成功を確信する。

まっすぐ走りながら、転移晶石への道を塞ぐ剣士を退かそうとな
イフを振り上げ、

「え」

ふと、背中に強い衝撃を感じた。

脚が止まる。筋肉が弛緩し、全身から力が抜けるようだった。

そのまま俺は、もつれるように膝をついた。目の前には剣士。その姿に向かって、俺はまるで、赦しを請うて頭（こぶ）を垂れるような格好になってしまう。

何、が……？

疑問が脳を埋めていく。

目の前の剣士は何もしていない。槍使いの動きも止めている。ならばなぜ？

疑問のままに、首だけで背後へ振り返ると、

「……そういう、こと、か……！」

痛みに歪む俺の視界に映ったのは。

こちらへ向けて、静かに弓を構えている 三人目の男の姿だった。

03 『強襲』（後書き）

用語集

ゲートクリスタル 転移晶石【施設】

街の至るところや、ゾーンの途中などに設置されている、水晶球の置かれた台座。触れることによって、設定された場所へ瞬間移動することが出来る。

SOCにおいての利用頻度は、各施設の中でも最多と言えるだろう。

また設置場所の近くのエリアは、待ち伏せを防ぐために戦闘禁止エリアとして指定されている。

その中ではパーティ以外のプレイヤーは不可視に設定され、そもそも発見さえできない。

蔦縛り（つたしばり）【スキル】

灰属性のスキル。設置型。

地面に向かって種子を植えつけ、それを踏みつけた者を問答無用で捕縛する。

効果範囲も縛る時間も短く、また阻害されるのは移動のみでスキルの使用などに制限はないので使い勝手はよくないが、解く方法が時間経過以外に皆無なのが利点の一つである。

なお緑属性にはほぼ上位互換で、縛ると同時にダメージまで与える《茨縛り》がある。

草原【ステージ】

緑色に対応した、三番街から行けるステージ。

出現モンスターの多様性と、フィールドの広大さが特徴。

SOCのステージの中では最もクセが少ないステージである。

04 『凜として』

まずい……、まずいまずいまずい！

俺は焦る。

それは恐らく、この世界に来てから初めて味わった焦燥だった。

目の前には敵。

背後にも敵。

捕えたはずの敵ですら、そろそろ自由になる頃だ。

どうして気がつかなかった。

いや、それ以前に、いったどこに隠れていたというのか。

三人目の姿などまるで見当たらなかった。こんな平坦な草原に、ハイディング身を隠せるような場所なんてほとんどないというのに。隠形系のスキルでも習得していたのか？ それにしたって、何も無い平地で完全に姿を隠すなんてスキルなんて聞いたことが……！

「……、く」

いずれにせよ、とんでもないミスだ。

そう、

文字通り 致命的なまでに。

「……っ」

HPは3割以上削れている。が、それはまだ半分以上残っているという意味だ。

けれど身体の自由はほとんど効かない。

…… 《麻痺》だ。

ゲームに慣れた思考が、頭の片隅で冷静に答えを出す。

背中に受けた矢の攻撃に、麻痺の追加効果を加えていたに違い無い。そのせいも、背中や腹の痛みは弱くなっていた。同時に手足の

感覚も弱い。末端に妙な痺れがある。

一定時間の行動停止、そして以降の敏捷値すばやかひの低下。

SoCに幾つかある状態異常の内、それが、麻痺によるペナルティの内容だ。

この状況では、まさしく致命的と言っている効果だろう。

「……………」

舐めていた、のだろうか。

舞い上がっていたのだろうか。

それは、そうなのだろう。少なくとも否定はできない。

突然ゲームの世界に迷いこんでしまいました。なんて、そんな現
状に、俺は少なからず憧れを抱いていたと思う。

恐怖や不安よりも、好奇や興奮の方が先に立っていた。

それが 悪かったのだろうか。

「くそ」

吐き捨てる、というよりは、零れ出るように言葉が漏れた。

それに反応した訳でもないだろうが、目の前の男が剣を振り上げる。

振り下ろす。

「ぐっ！？」

刃が肩を撫で斬った。

痛みはさして気にならない。現実現実に斬られていたら、俺はその時点で痛覚に負けていただろう。だがここでは痛みが弱い。ゼロではないが、耐えられないほどでもない。

ただ自分の肉を抉られる、その吐き気を催すような感触が酷く不快だった。

確かに斬られたというのに、俺の肩からは血も流れてこない。代わりに頭の中にあるHPのゲージがまた目に見えて減少するのが見

えて、なんだか現実感に欠けていた。

HPがなくなったら。もし、死んでしまったら。

俺はいつたい、どうなってしまうのだろうか。

あくまでゲーム的に、街にある神殿へと戻されるのだろうか。

それとも、それで、お終いなのだろうか。

ご都合主義の神様は店仕舞いなのだろうか。

わからない。

刃が再度、振り上げられる。

あと何度の攻撃に、俺のHPは耐えられるだろうか。なにせステ貧の《灰色》だ。単なる通常攻撃とはいえ、こつもクリティカルに受けていては、もう一、二撃でいい加減ヤバいとは思う。

「……………」

光を受け、鋭く輝く刃を、もう何も考えないまま俺は見つめていた。

これで死ぬかもしれないのに。

俺はただ、何も考えずにその剣だけを見続けていた。

そして、そのまま。

刃は、振り下ろされなかった。

「え…………？」

剣を持つ男のすぐ後ろ。

振り上げた腕を、男の背中側から握って止めている者がいたからだ。

「うん、アブないアブない。大丈夫だった？ 大丈夫だったよねー？ うん、大丈夫だ！ 男の子だもんなっ！！」

酷く場違いな、底抜けに明るい声が鼓膜を揺さぶった。
それは女性の声だった。

「じゃ、今ちやちやっと助けるから、待っててねーん」
「は え？」

耳朶を刺激する軽やかな声は、しかしその印象に反して強く脳を揺さぶった。

眠りかけていた精神を、目を覚ませとばかりに叩き起す声音だ。
そして、

「 やっ」

という軽い掛け声と共に、剣の男が猛烈な勢いで横に吹っ飛んでいた。

女性が、凄まじい速度で蹴り飛ばしたのだ。

「NPCは、動きが単調でいかんねー」

女性が笑って言う。

眩しい笑顔だった。比喩的な表現じゃない。長い髪の毛が、文字通り光を乱反射するように、確かに煌めいて見えたのだ。

冷静にその姿を観察すると、それは同い年くらいの少女だった。皮の防具や金属の鎧に身を包む人間たちの中で、恐ろしく場違いな、ワンピースタイプの洋服を風になびかせている。それがまた、大きく丸い瞳と、彼女の持つ活動的な雰囲気にもまるでそぐっていない。にもかかわらず不自然さは存在せず、彼女はただ健康的な美しさを放っていた。

何色と言っているのか判らない長髪。角度によって光の反射が変わり、一秒前と一秒後ではまったく別の彩りになっている。

どこか幻想的な少女だった。

それは何も、見た目の雰囲気だけが理由ではない。

まるで幼い頃に憧れていたヒーローのように。劇的なタイミングで助けにきてくれた、嘘のような少女。ご都合主義の女神が、微笑んだかのようなタイミングだ。

太陽のような　と表現してもいいほどの笑顔を見せる、少女。彼女は俺の目の前に屈み込むと、トンと俺の肩を軽く叩く。

「ほら、もう動けるでしょ？」

「え　あ、ああ」

「んっ、よし！　ほら立て！　立つんだじょー。あっはははー！！」
促されるままに俺は立ち上がる。

少女はにっこりと、花の咲いたように笑んでいた。

「じゃ、ちよつちソコで待っててね？」

言うなり彼女は走り出し、蹴り飛ばした剣士の方へと矢のように飛んでいった。

「速っ……！！」

とんでもない速度だった。

少女自身が一筋の風であるかのような。運動能力の上がった今に俺にさえ、再現できそうにないほどの速力。

彼女は一瞬で距離を詰めると、その勢いのまま剣士へ強烈な拳を放つ。

「ぱーんちっ！」

どこか間の抜けたような掛け声。

だが共に聞こえたのは、風を斬るような　いや、風が爆ぜるような強烈な響きだった。

速度がそのまま打撃力へと変換された拳の一撃は、先の槍使いと同じ突き技でありながら、しかしそのレベルは段違いの領域に至っていた。

剣士の残っていたHPが、一撃で余さず消し飛ぶ。

信じられない威力だった。

と、そこに矢が飛来する。

先程、俺を奇襲した弓使いによる攻撃だ。

そして同時に、槍使いの方も《蔦縛り》から抜けだし、少女の方へと突進していった。

どちらも俺の方など見向きもしていない。

それは俺と少女、どちらがより脅威なのかを正しく理解していたがゆえのことだろう。

けれど。

彼らの理解が、実のところ正解には到達していなかったと言える。攻撃の続行は、彼らにとって“たったひとつの冴えたやり方”だったとは到底言えない。

……もし、彼女の実力を本当に理解していたのなら。

真に採るべき行動は、一秒でも早く彼女の元から逃げ出すことのはずだったのだから。

弓の連射を、彼女は踊るように避ける。

ほとんど最小の動きで、鼻歌交じりに彼女は軌道を読み切っていた。飛び行く矢など、彼女の舞を盛り立てる小道具の一つでしかない。

矢の次に飛びこんで来たのは、槍を持った男だった。

全体重を乗せた刺突の一撃。

それを彼女は、

「ほっ
」

空中で縦に反回転しながら、ほとんど曲芸さながらに回避する。

そのまま彼女は、身軽にも槍の柄に逆立つように乗ると、

「はっ
」

倒れるように回転し、男の顔面に強烈な踵落としを叩き込む。

バランスを崩し蹈躡を踏む槍使いを後目に、少女は軽々と地面に着地する。そのまま今度は横向きに身の捻りを加え、

「おりゃあ　！」

尋常じゃない威力と思しき回し蹴りを、男の顔面へと穿ち入れた。

槍使いのHPは、それでゼロの値まで一気に消し飛ぶ。

寸前、男が取り落とした槍を拾い上げると、彼女は振りかぶり、弓使い目掛けて思いつ切り投擲していた。

直撃。

HPをこつそりと削られた弓使いは、それでもまだ彼女に反撃を試みようとしていたが、

「無駄無駄あ　！」

叫ぶ少女が一気に間合いを詰め、

「オラオラア　！」

目にも止まらぬ速さで拳を一気に叩きこんだ。

「あははははは　！！！」

テンションがおかしい。明らかにオーバーキルだった。

弓使いは吹き飛ばされ、光の粒子となって霧散する。

僅か一分にも満たない戦闘だった。

凄まじい早業で三人を倒し切った少女が、笑顔で戻ってくる。

数秒前までの、あの尋常じゃない戦闘力を見せた人物と同じ人間とは、到底思えない満面の笑みで。

「大丈夫だったー？」

「あ　ああ。ありがとう。俺は大丈夫だけど……」

正直、いろいろとそれどころではない。
なんなんだ、この少女は。
恐ろしいまでに強かったが……。

「災難だったねえ、いきなりNPC型に遭っちゃうなんて」と、少女が俺に、そんなことを言った。

「NPC型……？」

聞き覚えのない言葉を、そのまま鸚鵡返しにした俺に、少女が頷いて答える。

「そう、NPC型。プレイヤーと同じ能力を持つてる　でも、モンスターなんだよ」

「モンスター……だって？」

あれが……？
モンスター？

「そんなはず」

ない、とは言えない、か。

……ならばとそう考えてみると、確かに自分が感じていた違和の正体も思いつくことができる。

さっきの三人には、どこかモンスターっぽい部分があった気がする。

相対している感じが、なんとなく、それまで戦っていたモンスターと似たような感覚だったのだ。

モンスターっぽいというのが違うなら、あるいはそう、プログラムっぽいというか。もしくは逆に、人間っぽくないと言ってもいい。たとえるならば、ロボット。

自己の意志を持たず、命令の通りプログラムにしか行動できない、人形。
先の三人は、つまり、人間ではなかったということらしい。

……それにしても。
彼女は どうして そんなことをしているのだろう。 とうか、
いたい誰なんだ。

疑問が表情に出ているのか、俺の顔を見て彼女は首を傾げた。

「ん、……どしたの？」

「あー、えっと。君は」

「んん？ わたし？」

少女がはにかんで言う。

「わたしは《リン》だよ」

「リン……」

それが名前なのだろう。

本名なのか……いや、恐らくはプレイヤーネームのほうだろうか。
割とありそうな名前だけに判断がつかない。

「今、街を指しているトコだよな？」

リンが訊ねてきた。

「あ……、うん。そうだけど」

「ん。街ならその石からちゃんと跳べるから、その辺は心配しな
くてもいいよ」

「……どうも。それで、君は？ えっと……、街には行かないのか
？」

「私はやることあるから。でも君は、街に行つて情報収集してきた
ほうがいいと思うよ」

「……まあ、そのつもりだけど……」

「んー」

と言つて、リンは笑顔を見せた。

その笑顔に。

俺はなぜか 見覚えがあるような気がして。

「じゃ、私は行くよ」

リンが言う。

「え、……ああ」

脳裏に貼りつくような違和感を振り払い、俺は慌てて首肯した。

「でもまあ、石に触れるまでは見送ってあげるね！」

「……どうも」

そんなことを話しながら、二人で石　　転移晶石の前まで向かった。

転移晶石は、見た目には透き通る綺麗な球形の水晶だ。それが地面に固定された燭台のようなものに乗せられている。

晶石はフィールドごとに色が違う。《草原》フィールドの晶石は緑色だ。

「触れれば、それだけで起動するよ」

というリンの言葉に後押しされるように、俺は淡いエメラルドのような晶石に手を触れる。

瞬間、足元から様々な色の光の粒子が浮き上がって、俺の身体を包んでいった。

振り向くと、こちらへ手を振っているリンが見えた。
彼女が口を開く。

「またね　　アイリ」

その言葉を最後に、視界は急速に暗転していった。
世界が、ひっくり返る。

04 『凍として』（後書き）

用語集

NPC【ゲーム用語】

ノンプレイヤーキャラクターのこと。

この異世界においては、なぜか野生化・モンスター化しているNPCが存在する。

詳細不明。

麻痺【状態異常】

SOCにおけるステータス異常の一種。

数秒の行動不能と、その後回復まで敏捷値にマイナス補正を受ける。

「……………、おええ」

刺すような頭痛と、異様な吐き気で我に返った。

同時に感じたのは、ああ俺にはちゃんと身体があるんだ、という奇妙な自覚だ。

痛むというコト、苦しむというコトは、即ち感覚があるというコトで、それはつまり、身体が存在するというコト。

そんな当たり前なはずの事実にも、なぜだか少し、ほっとした。

口の中に、ジャリジャリとした砂の味を感じる。それを唾と共に吐きだしたところで、俺はあることに気がついた。

即ち。

自分が、地面の上につつ伏せになって倒れている、ということにだ。

「……………、うあ」

これは、^{ワープ}転移に失敗したのだろうか。

それとも仕様なのだろうか。

どっちだったところで嫌な気分だ。

ともかくにも気持ちが悪かった。内臓を全て裏返しにされたよ
うな、なんとも言えないダメだコレ感が、身体の底へ粘ついて沈澱
していた。

衣服に付着した土埃を払いつつ、立ち上がる。

頭痛も吐き気もその頃にはほぼ収まりつつあって、俺は若干ばかりの安堵を覚えていた。

そしてようやく、落ち着いて辺りを観察できるようになる。

周囲は、見たこともないような街だった。
正確には、現実には見たことのない風景、というべきか。
ところどころに植物が^{みどり}あしらわれた特徴的な街並みは、しかし、
現実以外でならば確かに記憶にある光景だ。

《^{クリスタルパレス}空透領域》。

SOCにおける、最大にして唯一の、広大なるプレイヤータウンである。

もっとも大層なネーミングの割に、大抵のプレイヤーの間はほとんど《街》としか呼ばない。たつた今使用した転移晶石にしても、プレイヤー間での呼称はもっぱら《ワープ石》とか、酷ければ《石》だけとか。その程度だ。

「さて……どうやら無事に帰還できたみたいだ、け、ど……」
周囲の人が、異様な目で俺を見ている。

「……」
まあ、急に街中でのたうつ人間がいれば、それは注目を集めるだろうが それよりも。

見た瞬間に、あるいは見られた瞬間にわかった。

彼らはNPCじゃない、人間だ。

ここまで感情の溢れる人々が 主に何コイツ的な怪訝な思いだとしても 先の奴らと同類とは、どうしたって思えなかった。

「……さて」
俺は人目を避けるように、慌てて近くの路地へと走った。
なんかスゲエ目で見られてしまった。物凄い不審人物を見る顔だった、アレは。

人を探して街に来て、その街で今度は人目から逃れようとするとは。

何をやっているんだ俺は。

「……さてと」

路地裏で俺は、腰からまたナイフを抜いた。

先の二の舞を演じる訳にはいかない。

とりあえず、すぐ横にあった壁を、ナイフの峰で殴りつけてみた。

「~~~~っ!」

手、超、痛っ!

刀身は止められていた。めっちゃ弾かれた。反動で右手がめっちゃ痺れている。ヒットポイントは削られていないが、NPCどもの攻撃より痛かった。

……壁が、硬すぎる。今の俺なら、コンクリートくらいなら軽く斬れそうな気がしたが、とてもじゃないがこの壁は壊せない。

俺は次に地面にナイフを突き立ててみたが、やはり弾かれる。手が痛い。

「ゲームと同じ、か……」

フィールドなら、たとえば樹を斬ることもゲームではできた。だが街の中のオブジェクトは全て破壊不可能だ。それはここでも同じらしい。

俺は脳内のウィンドウを参照し、今度は適当な攻撃スキルの発動を試してみる。

……やはり発動しない。攻撃系のスキルもまた、街中では基本的に発動しないのだ。

ならば。

「あんまりやりたくないんだが……」
最後に。

俺は、自分の手に、思いつ切りナイフを「おらっ!」突き立ててみた痛い!

「……………、っあ……………」
ただし刺された左手ではなく、刺した右腕の方が痛い。
というか、刺さっていない。壁や地面と同様、まるで金属のように硬い。いや、正確には手ではなく、そのほんの数ミリ前の空間に見えない壁のようなモノが存在するのだ。刃はそれに防がれているともあれ、とりあえずの確認はできた。これなら街の中で、いきなり襲われるような羽目にはなるまい。それさえわかれば十分だ。
俺はとりあえず、裏路地から大通りの方へ、回り込むように進路を取った。

大通りへと立ち入った俺は、しばし言葉を失ってしまふ。

白亜の石畳で舗装された街路。
辺りを覆う青々とした街路樹。
通りへ門戸を開く商店の数々。
そして、道に溢れる人ばかり。

人がいる。

そのことへ、ようやく安堵している自分がいた。

だが 何よりも。

ゲームの中で幾らでも歩いてきたはずの街が、実際に目の前に広がっている。そのことに俺は、言い知れぬ感動を覚えていた。
フィールドの草原よりも、遥かに“ゲーム”の中だという感覚がある。それが妙に楽しかった。

……………いやはや。

ついさつき大変な目に遭ったばかりだというのに、我ながら安い精神だ。

上へ上へと続く、高い街並みと空を見上げる。
空透領域は、SOCにおいてほとんど唯一のプレイヤータウンだ。
MMORPGには欠かせない類の施設システム 銀行や宿屋を始めとし
て、神殿、ギルド、クエストの発注所に、市場や商店に至るまで
の全てが、この街に集中させられている。
この手のゲームとしては、結構思い切った仕組みなのではないだ
ろうか。

だが、その分というか。

この街は驚くほどに広い。ちょっと引くほど広い。全部見て回る
うとすれば、それだけで一日を費やせるくらいには広大だった。

「……、」
それにしても。

なにやら、街の様子がおかしい。

どこか刺々しいというか、恐慌とした空気が漂っている気がする。

辺りに溢れる人影は、恐らく俺と同じ境遇の人間だと考えて間違
いないだろう。

見ればわかる。服装とか、雰囲気もそうだが、それ以前によく目
を凝らしてみれば、相手がプレイヤーであることくらいはステータ
ス画面で文字通りに見られるのだから。

つまり全員が、気づけばわけもわからずゲームの中の世界（とい
う確証はないが）に送られてしまった。と。そう考えていいと思
う。

時折聞こえてくる「ここはどこだ!」「あんた誰なんだ!」「エト
セトラの叫声や怒号が、そして何より人々の顔に色濃く影を落とす
不安と不信が、俺の推測を強く後押ししていた。

中には、「これは何かのイベントなんだろ!?!」などと叫んでい
る者もいる。

街は完全に機能不全に陥っていた。

「……、うーん」
街に着いたら話を聞けるかと思ったが、どうやらそう上手くはいかないらしい。

誰も彼も、表情に浮かべているのは動揺と焦燥、不安や疑念といった感情だった。時折目が合う者は、誰しも敵意と警戒の込められた視線を向けてくる。

……こんな状況下で平然としている俺やリンのほうが、おかしいとでも言うように。

「……」
というか。

思いつ切り訊きそびれたが、あいつは何者だったのだろうか……。あからさまに何かを知っている風だったようだが。

街に行けば何かがわかるはず。そんな風に勝手に思ってしまった。いたけれど、こんな状況なら彼女に訊いておくべきだった。

ほぼ正円に近い形をしたこの街は、全部で11のエリアに分けられている。そして円の中心部まちにある、それより小さな円として囲われた部分が、ゲーム内で死したプレイヤーが復活する神殿しせうのある《零番街》。そして外周部を均等な形で十に区分けしたのが、そのまま《壱番街》から《拾番街》までの各エリアとなっている。

たとして言うなら、新品のトレットペーパーを横から見た図が近いと思う。芯の部分が零番街で、紙の部分を十に分けたのが壱番街から拾番街という感じ。

見る限りでは、表通りに溢れる人影は少なくとも三桁には届くと思つ。

ここが何番街かは判らないが、仮にこのやたらと広い街の全域に同じ境遇の人がいるとすれば、その数は千や二千を軽く超えると考

えていいだろう。

……とりあえず、誰かと話がしたい。

そう考えた俺は、辺りに溢れる人の中からなるべく冷静に見える人間を選んで、声をかけてみることに決めた。

「あのっ！」

「うん？」

選んだのは、建物に背を預けて腕を組み、じつと街の様子を眺めている一人の青年だ。

俺と同じ黒の短髪で、見た目にはそう特徴がないが、こんな状況だというのにどこか余裕の見える、妙におおらかな表情が印象的だった。いやに綺麗な顔をした優男風で、女装とか似合いそうだなあ、とか何となしに思った。

年齢的には、たぶん同年代か、少し上くらいか。……いや、見た目の年齢からじゃ、中身の年齢は判らないのか？

装備的には、SOCでは　　というかこの手のゲームでは　　ス
タンダードな、金属鎧に片手直剣、加えて盾を持ち合わせた騎士風のスタイルだ。

「すみません、少しいいですか？」

俺がそう問うと、彼は朗らかな笑みを見せて答えた。

「何かな？」

ハスキーな声音。

玲瓏な響きがあるが、この状況ではむしろ頼もしく聞こえた。

「ちよつと話ができそうなヒト捜してたんだけど……」

「ああ、この状況についてだね」

「えっと　うん」

「ん。いいよ。僕も誰かと話がしたくて、冷静そうな人を捜してた

んだ。君、名前は？」

「俺は」

一瞬詰まった。

どう名乗ろうかと思ったが、考えてみれば俺は、ハンドルネームHNも実名も同じなのだ。

ゲームを始めた当初、何も考えずにキャラ名を本名そのままにしてしまった。少し後悔しているが、あんまり本名だとも思われていない。

そもそも愛宕逢理あたしあじりという本名が、俺はあまり好きじゃなかった。字面だけ見たときに、まず男だと思われなからだ。

まあ、とはいえ他に名乗る名もない。

「アイリ、です」

そう名乗った。

「そ。僕はサイス。サイスって名前だよ。ま、アバターの名前だけどね」

彼 サイスは、なぜか嬉しそうにそう言いつつ、通りの人々へ目をやった。

俺も釣られて視線が移る。

「なにぶん、状況が状況だしね。誰も彼も動揺してる。中にはパニックを起こしている人間までいる始末だ。そんな場合じゃないのにね。そんな状況じゃないのにね」

咎めている様子ではない。かといって憐れんでいるのとも違う。

あえて言うなら面白がっているような……いや、それも語弊があるか。

どうにも籠められた感情の読めない言葉だった。

「……まあ、俺はゲーム世代っすからね。こんな状況でも、『あーなんかマンガみたいだなー』なんて考えちゃうから。パツと見は冷静に見えるかもしれないけど、戸惑ってるのは同じですよ」

なんと言っているのかかわからず、お茶を濁すような答えを俺は返した。

その言葉に彼も笑う。

「ははっ。確かにそうだ、僕もそうだ。考えようによっては、冷静じゃないほうが正しいのかもしれないね」

「……はあ」

くつくつと笑うサイズ。

うーん、どうにも掴みにくいというか、有り体に言えば、正直かなり変な奴みたいだ。たとえるなら靄みたいな感じ。人選を間違ってたかもしれない。

「で、話だっけ。何か訊きたいことが？ といっても、僕にわかることなんてほとんどないけど」

サイズはそこまで言うつと、ふと思いついたように付け加える。

「ああ、それと。別に敬語じゃなくていいよ。別に敬語じゃなくていい。たぶん年代くらいだろう？ 僕も使ってないし。どうも敬語は苦手です」

「……わかった」

俺は頷き、改めてサイズに向き直る。

「えつと……、だな。こんなことを訊くのもバカらしいんだが……。こっつてゲームの、『SOC』の中……だよな？」

なんだか自分が、ひどく間抜けなコトを言っている気になる。

いい精神科を紹介するよ、とか笑顔で言われたらどうしよう。

「……どうだろうね」

幸いにして、サイズはそこでボケてはこなかった。

「それはどうだろう。SOCと関係があるのは間違いないと思うけど、少なくとも僕は、人間がゲームの世界に、電子情報の中に入るなんて話は、寡聞にして知らないよ」

「いや……それはそうだけど」

「勿論、君の言いたいことはわかる。君の言いたいことはわかるさ」
言葉を二度繰り返すのはクセなのだろうか。特徴的な話し方をする奴だ。

サイスは腕を組み、妙に大仰な拳動で頷きながら言う。

「でも、そんなこと、どうでもよくないかな？」

「え……？」

「だってそうだろう？ 確かにゲームの中なのかもしれない。でもたとえば、どこかの異世界とかにいるのかもしれないし、もしくはただの夢、幻覚を見てるだけなのかもしれない。でもそんなこと、僕らには知りようがないだろう？」

「そりゃ、そうだけどさ」

「そう。だから、そんなことを考える意味なんてないさ」

「……確かに」

俺は頷いた。理のある考え方だと思う。

ここがゲームの世界だったところで、あるいは何かのファンタジー小説よろしく異世界だったところで、俺にそれを確認する術がない。今立っている現実（よこしま）が全てだ。

ならば、そのいずれだったところで執るべき行動は変わらないだろう。少なくとも当面は。

重要なのは、「ここがどこか」ではなく、「これからどうすべきか」のほうなのだから。

「悪いな。下らないことを訊いた」

俺は頭を下げた。

だがサイスは笑って首を振る。

「そんなことはないさ。ここがゲームの中だとして、なら僕たちはここから現実に戻る方法を捜し出すとしたら、やっぱりこれが“ゲーム”だということに則ったモノになるだろうからね。たとえば、七つの秘宝を集める、とかさ」

僕もそういう小説は好きだよ。

なんてサイスは笑う。

しかし、俺は別のところで衝撃を受けていた。

「現実に 帰る」

言われてみれば。まず考えるべきは、そのことであつたのかも
れない。

まるで考えていなかった。我ながらどうかしている。

「……どうやったら帰れるんだろうな？」

「わからないね。てんでわからないよ。ゲーム的に考えるなら、
つぱりクリアするってのが妥当だろうけれど……」

このゲームには、そもそも明確な“クリア”というものが設定さ
れていない。

いかにMMOとはいえ、ロールプレイングゲーム RPGであることに間違いはない。役割
を演じる遊び。だからSOC世界にも、その下敷きとなる世界観設
定は存在する。

が、かといって明確なストーリーみたいなのは存在しないはず
だった。

「ま、結局まずは、これからどうすべきかを考えるのが先決なんだ
ろうね」

サイスの言葉に、俺は首肯を返す。

「ああ。ここがゲームの中だとしても、違つとしても、それは変わ
らない」

「もつとも、ここに来る前はパソコンの前において、自分がゲームと
同じ格好をしてるんだ。何だかんだ言つたけど、ゲームの中だと考
えるのが一番妥当なのは間違いないだろうね」

「……サイスも、ここに来る直前にはSOCをやってたのか？」
俺と同じだ。

最後の記憶が少し混濁しているが、俺も確か、自室でSOCをプ
レイしていた。

はずだ。

「そうだね。僕の最後の記憶はそれだよ。たぶん、皆そうなんじゃ

ないかな」

そう言ってサイスは、肩をすくめて苦笑した。

子供のようなサイスの顔に、その挙動は妙に似合っている気がする。

と。

そのときだった。

「面白い話をしてるのですね」

なんて。

そんな声が、背後から聞えてきたのは。

05 『街』（後書き）

用語集

クリスタルパレス 空透領域【施設】

要するにプレイヤータウン。SOCにおいては、各フィールドの休憩場を除いてほぼ唯一のセーブポイント。通称《街》。

零番街↪拾番街の全11エリアに区分けされ、そのひとつひとつが、まったく違うコンセプトに基づいた外観をしている。

とにかく異様に広い。区分ひとつが普通のゲームのプレイヤータウンひとつ分の面積は余裕であり、全て巡ろうと思ったら、それだけで一日を潰せるだろう。

なので移動はもっぱら転移晶石。プレイヤーの中には車やバイクを駆る者もいる。

ゲーム設定的には、人類に残された最後の街。《人類最後の最前線》。

都合のいい諸々の設定は、全て《色の力》の一言で片付けられている。

06 『剣と鎌』

「でも、やっぱりここはゲームの中だと思つたのですよ」
すたすたとこちらへ近づきながら意見を述べるのは、一人の小さな女の子だった。

「えっと……」

「わたしはツルギといいます。よろしく」

「……はあ、どうも」

差し出された手を、反射的に取ってしまう。

「で、あなたのお名前は？」

「アイリ……ですけど」

「そうですか。よろしくお願いします」

かなりマイペースに頭を下げられる。

この少女は誰なのだろう、という俺の疑問は、今のところ置き去りだった。

彼女は次いで、サイスとも自己紹介を交わしていた。だが俺と違いサイスの方はまったく動じず、にこやかに笑って彼女 ツルギに応えている。

握手をしているということは、知り合いというわけじゃないのだろうが……。

なんとというか、動じない性格をしているらしい。

ツルギと名乗ったその少女は、背がかなり低く、俺の胸に届くかどうかといったところ。

長い髪をツインテールにして縛っており、動きに合わせてゆらゆらと揺れているのが特徴的だった。腰から提げている二本の刀が、彼女の華奢な体格とは酷くアンバランスに見える。けれど、か弱そうな外見とは裏腹に視線は意外なほど鋭く、芯の方は強そうな少女

だ。

加えて言えばツルギは、少しキツめな印象はあるものの、なかなか整った顔立ちをしていると思う。この手のゲームのプレイヤーとしては、かなり珍しいタイプだと言えよう。

SOCは割と女性にも人気があるが、やはり主流プレイヤーには男が多い。

……って、あれ？

でも、この姿はゲームアバターのものなんだよな？

すると、必ずしもツルギが女性とは、限らないということか……？

などと、こんがらがらる頭を立て直している内に会話は進んでいた。それで、ツルギちゃんだっけ。どうしてここがゲームの中だっけ？

十年來の友人だともいうように自然な流れで、サイスがツルギに訊ねる。

結構馴れ馴れしいよな、サイス。別に悪いとは思わないが。

「別に、大した理由はないのですが」

対するツルギの方も、これまた非常に自然な流れで会話に加わっていた。

……なんなんだろう、俺が気にしすぎなのだろうか。

これがゲームだと考えるなら不思議でもないんだけど。こう現実味が増えてくると、そういう感慨は意識しづらくなってくる。

「恐らくですが、やはり全員が『SOC』のプレイヤーであり、かつ直前までプレイしていた人たちのようですから」

ツルギが言う。

「やっぱり、そうなのか」

「別に訊いて回った訳じゃないですが。そんなふうに叫んでる方が幾人か」

「まあ……みたいだな」

呟いたのは俺だ。

彼女とて全員を確認したわけもないだろうが、この状況で数人そ
うだと確認できるなら、もう全員がそうだと見なしてしまつて問題
ないだろう。

ツルギは続けて語る。

「それに何より、オプションウィンドウを確認できるのが大きいで
すね」

「……オプションウィンドウ？」

サイスが首を傾げる。

「気づいてませんでしたか？」

と、ツルギ。

「SOCと同じものですね。ステータス表といいますが。あれを見
ることができのですよ」

「どうやるんだい？」

「頭で念じる、というか、思い浮かべるといいますか。とにかくそ
うすると、何となく頭の中に浮かぶのですよ」

「そうそう」

と、俺も追従して頷く。

「能力値とか、HPとか、そういうの見えるんだよな」
ただ。

それが、『ここがゲームの中の世界である』という結論には、必
ずしも結びつかないと思うが。

「うわ……本当に見えたよ。面白いなあ」

頭の中で試してみたのだろう。サイスがそう言った。

そこで俺も、改めて脳内の画面（変な言葉だ）を確認してみるこ
とにした。

正直、先程まではそれほどろじゃなさすぎて、そこまで詳しく中
を検めてはいないのだ。いや、これ見ながら歩くの結構難しいんで

すよ？

さておき。

改めて検めてみると（別にギャグではない）、まったく、驚くほどよくできたウィンドウだということ強く思われる。ログアウトが出来ないこと意外、利便性はゲームとやら遜色ないだろう。

あとまあ、画面の彩度がどうたらとかいう、諸々のコンフィング機能も消えてはいるが。

少なくとも、情報面ではほぼ遜色ない。

「……」

ふと思いつき、俺は《フレンドリスト》の画面を呼び出してみた。
フレンド
友達登録をしたプレイヤー同士は、互いに連絡を取り合ったり、ログイン状況を確認することが出来る。

まあ、MMOならばほぼ必須と言っているいい機能だろう。

見る限り、フレンドリストの中にいる全員がオンライン状態になっているわけではなかった。率にして四割ほどだろうか。

サイスもツルギも、この世界に飛ばされる直前までゲームをプレイしていたという。

それがこの世界へ送られてしまうことへの、ある種の条件になっていると考えるのであれば、恐らくはこの“オンライン”という表示は、即ち“今現在この世界に存在している”という意味合いになっているのだろう。

「アイツは、……来てないか」

俺は呟く。

このゲーム内における友達フレンドの中で、唯一現実でも友人であるヤツの名前を見る。

その名前の横には、ログイン状況を示すマークがあるが、今は点

灯していない。オフラインだということだ。

……巻き込まれては、いなかったか。

そのことに、素直に安堵している自分が、なんだか奇妙だった。

「まったく、徹底してるね。徹底してるよ」

サイスが言う。

「それになんて言うか、いかにもゲームっぽい。いかにも、だよ。ほんと、どうなってるんだろうなあ……」

「それがわかれば苦労しないさ」

「^{スキル}技とかも実際に使えるのかな？」

サイスがそう呟くと、ツルギが我が意を得たとばかりに身を乗り出し、

「それを試しに行きませんか？」

と、言った。

「お二人に声をかけたのも、実はそのためです。突然で恐縮なのですが、わたしとパーティを組んでいただけませんか？」

「いいよ」

即答で返すサイス。

「いやいや、もうちょっと考えろよ。」

仕方なく、俺が詳しい話を伺う役割を担うことにした。

「それってつまり、フィールドに出るってことか？」

「その通りですが？」

「いやいや、止めとけて。あそこスゲエのいんぞ」

「……、その口ぶりからして」

と、ツルギがじとつとした視線を俺に向ける。

「アイリさんは、既に一度、フィールドへ出たんですか？」

「いや、出たっていうか」

「……あれ？」

そこで俺は、ようやく一つの疑問に至った。
確かめるために俺は、二人へ視線を向けて、訊く。

「二人は、最初っからこの街にいたのか？」

「……？ 当たり前じゃないですか」

「みんな、気づいたらこの街の中にいたんじゃないのかな。アイリは違うのかい？」

「……俺は」

違う。

俺だけが 違う？

「最初に気がついたのは、フィールドの上でだった。そこから街まで歩いてきたんだ」

二人が目を瞠る。

それほど驚くようなことを、俺が言ったということだろう。

「でも、そつか。考えてみりゃ、そうなのか」

この街に人がいるのは、初めからこの街に送られていたから。考えてみれば、それは考えるまでもないことだ。

だけど。

なら、なぜ俺だけがフィールドに投げ出されていたんだ？

「どこにいたの？」

サイスが訊ねてきた。

俺は答える。

「《草原》だけど」

「うーん……。僕が覚えてる限り、最後にいたのは街だったから。ゲームで最後に居た場所に飛ばされた、とかじゃないかな？」

……いや。

「確か俺も、最後は街にいた」

「ていうか、わたしが《火山》から街まで飛ばされていますから。そ

「ではないですね」

俺とツルギが、口々に反証を出した。

「サイスもあまり本気で言っていたわけではないらしく、

「だろうね」

と、すぐに撤回していた。

「バグか何かじゃないですか？」

ツルギが言う。

「いや、バグって……」

「しかし興味深いですね。やはりこの街には、転移晶石で戻ってきたのですか？」

「聞いちゃいねえ。」

「……うん。まあ」

「へえ、てことは、アレなんだ。ワープしてきたってことかい？ どうだった？」

どうもこころも気持ち悪かった。

できれば二度はやりたくないくらい。

「なんていうか……世界が揺れる感じ？」

「世界が揺れる、ですか。面白い表現ですね」

「いや、そんないいモンじゃないよ、あの感覚……」

「それで、先程言っていた『スゲエの』とはなんですか？」

「聞いちゃいねえ、その？」

本当にマイペースな方ですね、ツルギさんは。

別にいいけども。

俺はフィールドで気がついてからのことを二人に話す。

「モンスターとの戦闘や、NPCに襲われたこと、そしてリンに助けられたことまでを。」

「……ただし、リンに関してはぼかして伝えた。通りすがりのプレイヤーに助けってもらった、と。それだけしか言わないでいい。」

理由は特にならない。ただ、なんとなく隠しておくべきだと、俺は考えた。

「それは災難でしたねえ」

まったくそう思っていないさそうな、見るからに動きのない表情で、ツルギが言った。

「でも、楽しそうな経験したんだね」

サイスは笑っていた。

「しかし、やはり今の身体には、ゲームの能力値パラメーターが反映されているんですね」

「あ、ツルギちゃんもそう思ってたんだ？」

「ええ。でなければ、わたしがこんな重たい刀を、二本も持って歩けませんから。サイスさんも気づいてたんですね」

「僕あんまり体力ないからね」。歩いてたらずぐ気づいたよ」

平然と会話を続ける二人。

この感性には、若干ついて行けない部分があると思うのは俺だけなのだろうか。違うと信じたい。

「とにかく、戦闘に行くのはいいけど、NPCモンスターを見かけたら、まず逃げたほうが無難だろうな」

「相手のレベルにもよりますよね？ 三人でパーティを組めば勝てないこともないのでは」

意外と好戦的なことを言うツルギ。

いや、案外意外でもない気もするが、ともかく。

「とりあえず、最初は低層で、一撃で倒せる相手モンスターだけを相手にすべきだと思う」

同レベル帯になってくると、フィールドに湧く雑魚モンスターですら侮れなくなってくる。

危険は可能な限り避けるべきだ。

「なにせ、わかってないことが多すぎるからな。もし死にでもした

ら

もし死んでしまったら。

「……………」
「どうなるというのだろう。」

現実の自分も死ぬ？　そもそも現実の自分って何だ。ここは現実じゃないのか？

本当に？

「……………まあ、どうなるかわからないからな」

お茶を濁すように、俺は言った。

もつとも、戦闘訓練自体はしておくべきだろう。

これから先、何が起るかは本当にわからない。この世界で生き延びていくには、戦闘を避けることはできないだろう。そう思う。

「アイリさんの危惧ももつともです」

ツルギが言う。

「もちろん、安全マージンは十分に取っておくべきでしょう」

「そうだね。僕も、いきなり身体を上手く動かす自信はないよ」

サイスも肩を竦めて答えた。

それに頷きつつ、ツルギはこちらを見上げながら問う。

「装備から察しますに、お二方、レベルは高いほうですよね？」

「僕は100だよ。レベル100だ」

ツルギの確認に、隠すこともなくサイスが答えた。

「アイリさんは？」

「俺も100だ」

「それは重畳。わたしもです。レベル100が三人いれば、いや仮に一人だったとしても、最低レベルのフィールドならまず死なないはず。スキルが使えるのなら、なおさら」

ツルギはそこで言葉を切った。

後の判断を俺らに問う、と、そういうことだろう。

……困ったことに、特に反対する理由がなかった。フィールドから街に来るのには一時間近くかかったが、それでも身体の疲れはほとんどない。これからまた戦闘だとしても、特段の不安はない。

三人揃って初対面同士というパーティーには些かの不安が残るが

「……あれ、何で俺らなんだ？」

ふと、気になったことを俺は訊ねた。

「はい？ 何がです？」

「だから、何で俺らに声かけたんだ？ フレンド登録してる奴とかいるだろ。思ってたんだけど、これフレンドリストの奴に連絡とかできるんじゃないか？」

「いえ」

ツルギはかぶりを振って言う。

「フレンドリストの連中とも何人が会ったんですけどね。誰も彼も皆、恐慌状態でして。どいつもこいつも早朝の二ワトリみたいに騒ぎ立てるしかしておらず、路傍の石ほどにも使えそうになかったんですよね」

「……………」

「それなら知らない人とでも、冷静な人と組んだ方が、いくぶんマシというものでしょう」

「ああ、……………」

「……………」

「いや別に」

どうやらこのツルギという少女。

なんというか、結構な毒舌をお持ちのようだった。

「それで」

と、ツルギ。

「アイリさんも、一緒に行きませんか？ 既にフィールドの外へ出たことがあるというのなら、是非いろいろとご教授していただきたいのですが」

「 わかった、俺も一緒に行くよ」

俺は言った。

ツルギはにこりともせず、

「それは重畳です。……訊きたいこともありますし」

「……………」

逃さねえぞコラ、とばかりに瞳をキラめかせるツルギ。まるで獲物を狙う狩人が如き視線だ。

目の色が強い。恐ろしく剣呑な瞳だった。

冷たい何かが、ぞっと背筋を走った気がした。……なんなんだ。

「……………で、訊きたいことって？」

俺はそう問うた。

「まあそれは後ほどで」

ツルギは俺の追及を容易くかわすと、さて、と一言呟き、

「とりあえず、移動しましょうか」

「どこへ行くごうか？」

訊ねたのはサイスだ。

SOCにおけるフィールドは全部で10種類ある。

ツルギは一瞬首を傾げ、

「そうですね……。別にどこでも構わないのですが、まあ、あまりクセのあるフィールドは避けるべきでしょう。何かあるかわかりま

せんからね。 アイリさん

「ん、……何だ？」

「そのNPCモンスターとやらのレベルは、どれくらいだったのですか」

「あー……」

そういえば、わからない。

リンが言う通り、彼らが《モンスター》というカテゴリーに属するのであれば、見ただけでレベルが確認できたはずだ。

だがあのときの俺は、奴らのステータスを確認などしていない。

初めはプレイヤーだと思っていたので考えもしなかったし、襲われた後にはもはや確認する余裕すらなかった。

なにせ脳内画面を見ると、意識がそちらに削がれる。脳内ではあるわけなので、実際に視界を阻害されることはないのだが、それでも頭と瞳を両立して意識し続けるのは難しかった。慣れれば可能になるのかもしれないが、少なくとも今の俺には。

「……確認はしなかったけど、攻撃を喰らった限りでは、低く見積もっても、多分90よりは上だろうと思う」

結局、俺は勘に近い推測を述べるだけしかできない。

もっとも“レベル”という、ある種絶対と言ってもいい強度への指標があるのだから、那样的外れな推理という訳でもないはずだ。SOCのようなゲームにおいて、レベルの差というものはそれだけ絶対的だ。それがこの異世界においても同じであることを、俺は既に学んでいた。

……というか、恐らく。

彼らのレベルは、最高である100に設定されているような気が、俺にはするのだが。

エリアのレベル設定にまるで噛み合わない強さだ。

けれどそれを今言ったところで、二人が街から出るのを止めると

は思えなかった。

「では とりあえず、ここは参番街ですし、向かうフィールドは《草原》でよろしいですか？」

ツルギが言う。

10ある各フィールドは、それぞれ対応した10の街の内の一カ所から跳べる。逆を言えば、対応してないフィールドからは跳ぶことができない、という非常に面倒な仕様だ。

たとえば参番街はから転移可能なフィールドは《草原》だけ。それ以外のフィールドに、参番街から直接跳ぶことはできないのだ。

まあ言っても所詮は転移晶石による瞬間移動ワープなので、移動は一瞬で済んでしまう。何番街から何番街へでも自由自在。その辺りの無駄なこだわりと、そのクセ妙に無節操な世界観がS.O.Cの特徴だったりする。

賛否両論あるところだけけれど。

さておき。

「いや。他の所にしないか？」

俺は言った。

「どうしてです？」

「あー、……ほら、俺さっきまで草原にいたし。別のところに行きたいかな、って」

嘘だ。

あそこにはリングがいるから、咄嗟に行き先を逸らしてしまった。

「……………」

ツルギは数瞬ほど怪訝そうに眉根を寄せていたが、やがて静かに頷いた。

勘づかれただろうか。わからない。

そもそも俺は、どうして二人をリンに会わせたくないと考えているのだろう。それもわからない。

「まあ、構いませんけれど。では隣の《海》フィールドでは？」

「そうだね……じゃあ海で。　　サイスもそれでいいか？」

「うん？　　そうだね、僕は別にどこでもいいよ。どこでもいいさ」
大してこだわる様子もなくサイスは笑う。

「では式番街に向かいますか。露店を出してるプレイヤーはいないようですけれど、NPCのショップが普通に営業されていることは確認しています。回復薬なんかの準備をしていきましょう」

「そうだね」

俺も頷く。

回復アイテムにも効果があることは、俺が自分で確認済みだ。

俺たちは互いに一瞬、視線を交わし合った。

押し殺したような無表情のツルギ。

塗り隠したような微笑のサイス。

二人とも、正反対の感情を顔に浮かべているようで、その根底は共通している。

二人して、何考えてるのかわからない。

たった今そこで偶然会っただけの俺たちが、互いに命を預け合う。これがゲームだったのなら、それは別段、珍しがるような話ではない。

けれど　　これはゲームじゃない。

少なくとも俺はそうは思えない。

いくらゲームに近くても　　それでもゲームだとは思えなかった。

まったく奇妙な展開になったものだ。

俺はそう思う。

二人はどう思っているのだろうか。

「……………」

まあ、追々知っていけばいいことだ。

ゲームじゃない。

だからと言って、出会いを大切にしていけないわけじゃないはずだ。

俺は気取るように肩を竦めてから、転移晶石へと歩き始めた二人の背を駆け足で追った。

06 『剣と鎌』（後書き）

用語集

レベル【システム】

たぶん言うまでもないもの。最大値は100。キャラクターレベルとスキルレベルの二種があり、このうち前者のほうは、比較的簡単に最大まで達する。後者をどう割り振るかが、このゲームにおける育成のキモ。

火山【ステージ】

壱番街から転移できるステージ。対応する色は赤。火系の敵が多いので火傷に注意。

上のほうのエリアに進むと、熱によって体力を奪われるようになる。耐熱アイテムや特殊装備は必須。

07 『世界震』

もしHPがなくなったらどうなるのか。

それは、この世界に来てしまっただけから数時間、俺がずっと考えてることだ。

無論、そんなことを試すわけにはいかない。考えたくもない。

だが　だが、仮に。

もし仮に、HPがゼロになった瞬間、自分が死ぬとしよう。

ゲームのように街の教会で復活することもなく、かといって元の世界に帰れるということもなく。

自分の存在が、消えてなくなってしまうとしよう。

はつきり言ってしまうえば、消えた後のことを考えるのはナンセンスだ。

考えるべきは「死なないためにはどうするべきなのか」という点であり、死ぬことを前提で思考すること自体が間違っていると俺は思う。

けれど　。

その仮定に立ったとき、しかし何より間違っただけじゃないのは、「HPがゼロになったら死ぬ」という事柄が、必ずしも「HPがゼロにならない限りは死なない」などという保証をするモノではあり得ないということだ。

そこを取り違えてはならない。

現実世界にはなかった《ヒットポイント》という設定に思考を囚われてはならない。

どれほどゲームに近い世界であろうと、それでもこれはゲームではない。

少なくともそんな確証はない。

俺たちは、HPがゼロにならずとも、普通に死んでしまう可能性があるのだから。

たとえば、先刻。

俺は戦闘時の被ダメージを確認するために、敵モンスターの攻撃をわざと受けたとき。

今から思えば、俺はあるとき、それだけで命を落としていた可能性だって皆無ではないのだ。

あんなデカイオオカミの突進を受ければ、本来の虚弱な俺ならば、全身の骨がバッキバキに折れていた可能性を否定できない。それぐらいひ弱であるという、いらぬ自信が俺にはある。

無論、それなりの推測というか、確信があつての行動ではあつた。向上していた自身の身体能力、当たりどころに関わらずモンスターを一撃で倒せるナイフの威力。

そういった、なんというか“ゲーム的な”要因が下地にあつての行動だつた。

だが、それでも確信と確証は違う。

俺があの一撃で致命的な傷を受けていた可能性は　ゼロではない。

まあ、結果として、少なくとも物理的な外傷はほとんどHPで換算されるということは判明した。

けれどそれでも　たとえば餓死とか、あるいは溺死とか、もしくはショック死とか、はたまた病死とか　外側から傷を受ける以外の死因まで、この《HP》というシステムがカバーしてくれる確証なんてどこにもない。

俺たちは、上昇した自分の身体能力を過信してはならない。
惑わされてはならないのだ。

キリッ！

……みたいな。

そんなようなことを、俺は考えていたのだけれど。

「いやー、なんか楽しくなってくるねえ、これ。あははははは！」

「ランナーズ・ハイってヤツですかね。あんま走ってないですけど。

……ふふふふふ

「よしっ！ 喰らえっ！ あはははははっ！」

「ふ、ふふふふふっ。……死ねっ。死ねっ！」

なんかもう、いろいろブチ壊しだった。

「……………」

その後。

なんやかんやでフィールドまでやってきた俺たちは、とりあえずツルギとサイスの二人を戦闘に慣らすために、適当なモンスターと戦い始めたのだが……。

いや。

あはははははって。

死ねって。

正直、二人のテンションが上がりすぎてて怖い。

そりゃ気持ちわかるけれども。ヴァーチャルリアリティが実現されたかのような戦闘には、俺だって感動すら覚えたけれど。

俺が長々と思いつけてきたシリアス感が、なんかもう、全部無に

帰ったって感じだ。
ぱー、って感じ。
頭とかが。

「いやー、もう、楽しいなあ。こういうのってアレだよな。一度は夢見るよねー」

「ですね。私も刀を好きだけ思いつきり振り回すという夢が、遂に叶いました」

どんな夢だ。内容が怖すぎる。

……しかしまあ。

もしかしたら俺も、さっきまであんな感じのテンションでフィールドを駆け回っていたのかもしれないかと思うと、なんというか、もう、

「余計にいたたまれない……」

誰かこの二人を止めてくれ、と思う。

この二人には、いきなり異世界に飛ばされた的な焦燥感とか、悲壮感とか、そういったモノがまるで見当たらない。

どころか超楽しそう。超調子に乗ってる。

いやまあ、元よりそういう奴だと思っただけか（ツルギは向こうから来たけど）のだから、それで問題ないといえれば問題ないのだけれど……。

「……やっぱり、街で恐慌してた奴らの方が、人間の反応としては正常だったのかも……」
今更ながらに思う。

コイツら、変。

「……なに人のことを変な目で見ているんですかと。」

あらかた敵を倒し終えたツルギが、こちらに向き直り言った。

「……別に、変な目では見てねえよ」

「いいえ見てました。『うわコイツ、テンション上がったちゃってキモッ』みたいな目で」

「そこまで酷いことは考えていなかった……」
ていうか。

自覚あったのか。

「やれやれ。せつかく私たちが楽しんでいるというのに、一人で陰気な顔をして。空気の読めない男はモテませんよ?」

「余計なお世話だっつーの。つーか何でチヨイチヨイ毒舌混ぜてくるの?」

「えー……、キャラ作りです」

「すぐばれる嘘をつくな。明らかに素じゃねえか」

「てへっ」

「かわいくねえよ棒読み」

「チッ!」

「舌打ちには感情が籠もってるんだな……」

^{アホ}不毛な会話だった。

「さて……、ひと通り確認はできたかな」

サイズが言う。

サイズの色は《白》。俺と同じ特殊三色の内のひとつで、とにかく長期戦に特化した色だ。特徴はスキルの数が少なく、しかも弱いことにある。それじゃ駄目じゃん、と思うかもしれないが、きちんと秘密はある。《白》属性のスキルは、一度の戦闘で使うたびに威力や効果がどんどん上がっていく、という特殊仕様なのだ。最初は弱くても、攻撃をするたびに同じ技のダメージや速度がどんどん上

昇っていく。街に戻ったりしない限りは。

白、黒、灰の特殊三色は、どれもピーキーな性能をしている。

ちなみに、使用武器はオーソドックスな片手直剣。アバターネームがアレなだけに鎌でも振り回すのかと思っただが、特にそんなことはないようだった。

「そうだな……それに、例のNPCモンスターが出てこないのは幸運だった」

俺はサイスに答える。

「実際に見ておきたかった気もしますけれどねえ」

二刀を軽々と振り回しつつ言うのは、ツルギだ。

ツルギの色はスピードに特化した《紫》らしい。《黄》と並んで壁型二色と呼ばれる、主に敵のヘイトを稼ぐ色なのだが、どうやらツルギは攻撃重視なようだ。手数で攻めるタイプと見た。

「死んだらどうなるかわからない以上、あまり冒険はするべきじゃないと思うがな」

「死んだら ですか。やはり王道としては、現実世界でも死ぬ、って感じですかね」

「まあ、ゲームや漫画ならそうだろうな」

とはいえ実際、その“ゲームや漫画のような状況”に陥っている以上は、ツルギが言うような想像も一笑に付すことはできない。そこまで楽観視できるほど、平穏な状況ではないだろう。

「……王道、か」

現実世界の自分がどうなっているのかはわからない。こちらの世界に来ると同時に、向こうの自分の存在が消えてなくなってしまったとか。あるいは、今この瞬間も、現実世界には“別の自分”が同時に存在しているとか。

SF小説なりファンタジー漫画なりにかぶれたような世代の俺だ、想像するだけならいくらでも可能だった。だが証明も確認も現状で

は不可能だ。

その場合、最悪を想定しておくべきだろう。

「さて、どうする？　いったん街に戻るか？」

俺は問うた。

そろそろ街も落ち着いてくる頃合いだろう。これから先どういう流れになるか、見ておく必要があると思う。

それに、あまり長々いると、また例のNPC型モンスターが出てくるんじゃないかと、正直俺は戦々兢兢だった。襲われたのがちょっとトラウマになりつつある。

一応、念のための保険はある。《帰還符》というアイテムだ。

これを使うと、一瞬で最寄りの転移晶石までワープすることが可能だ。最初に襲われたときは、そもそも存在を忘れていたが、これを使えば高い確率で逃げられる。

連続使用はできないのだが、これがあるから、SOCではあまりPKが流行っていない。仮に襲っても、使われたら逃げられてしまう。転移晶石のすぐ付近は戦闘禁止区域なので、待ち構えて襲撃することもできない。

まあ、初手《麻痺》攻撃からのハメ殺しなど、PKに纏わるテクニクもいろいろあったりはするのだが。そもそもエリアによって《PK可能域》と《PK不可能域》もあったりして。絶対、という手段は存在しないのが現状だった。

けれど。

例のNPCモンスターは、あくまでモンスター扱いなのだ。確認はしていないけれど、恐らく。

つまり、PK不可能エリアという縛りを、軽く貫いてきてしまうという可能性があるということ。それが恐ろしい部分だった。

ともあれ、閑話休題。

「　そうですね。そろそろ動きにも慣れてきましたし。戻りますか」

俺の言葉に、ツルギが同意してそう言った。

サイスもまた頷き、

「僕も同意するよ。少し疲れてきたしね」

「では」

と、ツルギが帰還符を手の中に出す。

アイテムは全て、念じれば手の中に出すことができた。そこからさらに使用を念じれば、それぞれの効果を発揮してくれる。

俺もアイテムを具現化しようと、ナイフを腰に戻したところで、

世界が、揺れた。

「な　！」「わ、」「　ひゃっ!?!」

三者三様のリアクション。

だが俺は、他の二人に構うような余裕を失くしていた。

最初は、地震かと思った。

巨大な揺れ。だが、すぐに地震ではないことを俺は悟った。

揺れているのは地面じゃなく、あくまで世界、空間そのものだった。

転移晶石を使うときの酩酊感を、何倍にも大きくしたかのような激しい振動。たまらず、俺は口元を手で押さえた。

気持ち悪い。吐きそうだ。

いや、吐きたい。身体の中のモノを全て、外側に出してしまいたかった。

時間にすれば、きつと数秒ほど。

しかし感覚の上では永遠とすら思えるほどに引きのばされた刹那の後で、突如、足元の地面が青い光を発し始めた。

「なん　！？」

眩い輝き。

青いのはここが《海》だからだとすれば、これは転移晶石の光だろうか。

だが、この場所に石はない。

「アイリさんっ！」

ふと、名を呼ばれた。

声の方向に目を遣ると、二刀を地に投げ捨てたツルギが、こちらへ向かって必死に手を伸ばしているのが見えた。

「ツルギ　！」

名を呼び返しながら、俺もまた手を伸ばしてそれに応える。

互いの指が、触れ合おうとする　数瞬前に。

俺の意識は暗転した。

ふと、目を覚ます。

と同時に、俺は強烈な不快感に襲われた。

「　　、　　」

胃の腑の底から怖気と虫酸ががせり上がる。食堂を逆流し、口腔から外へ飛び出そうと走るそれを、俺は咄嗟に口と胸へ手を当てて抑え込んだ。

転移のたびに感じる嘔吐感。感じるのはこれで三度目だが、今回は今までで一番キツかった。数をこなせば慣れる、というわけでもないのだろうか。……嫌だな、それ。

これには個人差があるらしく、《海》に向かう転移のときも、サイスは多少ふらつきは感じるようだったが、それでも俺のように一度でグロッキーになるということもなく、数秒の間に回復していたツルギに至っては、まったく平気だという。本気で解せない。

今回も俺は、なんとかギリギリのところまで堪えることはできた。だがさすがに、しばらくは動きたくない。

俺は近くに見えた、崩れかけて瓦礫寸前の壁へと背をもたれた。そうして深く息をつき、別れてしまったツルギとサイスのことを思う。よくよく思い返してみると、転移の際のエフェクトであるあの発光は、ちょうど俺の足許の部分までが効果範囲だったようだ。ツルギもサイスも、光の外側にいたような気がする。

その証拠に、周囲に自分以外の誰かが存在する様子はない。つまり飛ばされたのは俺だけで、あの二人は巻き込まれていなかったのだと考えられる。多分。

「よかった、……と、素直に喜んでやりたいところだがなあ」
残念ながら、心細く思う気持ちがあることは否定できない。変わった奴らだが、同時に頼りになりそうでもあったのだから。

「……………」
俺は目を閉じ、脳内の画面を確認する。

二人と組んだパーティ設定が、いつの間にか解除されていた。二人が解いたのか……いや、これは転移の際に強制的に解除された、と見るべきだろう。

フレンド登録はしていない。街に帰ったら申し出るつもりだったのだが、判断が遅かったようだ。もし登録していればメッセージを送れたのだが。……まあ、過ぎたことを悔いても仕方がない。

とりあえず、今は自分のことをどうにかしよう。
俺は静かに息をつき、そしてから、ようやく周囲の様子へと目を
やった。

「……どこだ、ここ……」
呟く。

眼前の光景は、まったく見覚えのない景色だった。
それは、現実で、という意味だけではない。
俺は、ゲームの中ですら訪れたことのない場所にやって来てしま
ったようだった。

たとえるならば、ゴーストタウン、とでも言うところか。
上層が朽ちた高層ビル、錆びつき折れ曲がってる鉄柵、夜のよう
に黒く暗い空。地面の塗装は至るところが崩れ剥がれて、元は何か
の部品だったのだろう瓦礫が、今は無造作に打ち棄てられている。
そこは、まるで生命の気配が感じられない、無機的な灰色が広が
る世界だった。

「そうだ、マップ……」
ふと思いつき、俺は脳内画面の地図を確認した。
表示される文字を読む。

「《廃都はいとフィールド・第5ゾーン・第9エリア》……だと？」
聞いたことがない。
そんなフィールド、ゲームのS O Cには存在していなかった。
「……いや、」
違う。

思い出す。脳裏に、確かに引つ掛かるものがあった。
「そうだ、もしかして捌はち、玖く、拾番街じゅうばんがの、未解禁フィールドか……
？」

俺は言った。

SoCは、正式サービス開始からまだ一年半ほどしか経過していない、割と新しい部類のネットゲームである。最近はまだ新規の利用者も増加していて、サービスとしては、むしろこれから本番といったところだろう。

そんな中、まだ一般開放されていないフィールドが存在した。

SoCのフィールドは、今のところ全七種だ。

即ち《火山》、《海》、《草原》、《砂漠》、《沼》、《荒野》、《雪山》である。

これはそれぞれ、SoCに存在する職業として色に対応している。つまり《赤》、《青》、《緑》、《黄》、《紫》、《橙》、《藍》の七色だ。

しかし、これでは残る三色、即ち《白》、《黒》、《灰》に対応するステージがない。その三フィールドは未実装なのだ。

だが、その三フィールドも公開間近だったらしい。運営から正式アウンスがあったわけではないが、近々リリースされるという噂は色濃かった。

「で、《廃都》か……。つまり、これが多分、灰色に相当するステージってことだろうな」

周囲の色合いから、俺はそう推測する。

自分も灰色属性であるだけに、灰色フィールドの開放はそれなりに待ち焦がれていたイベントではあるのだが

「いやまさか、こんなふうを訪れることになるとはね……」
さすがに予想だにしていなかった。

つかまあ、ゲームの世界に閉じ込められた時点で既に、予想外以外の何物でもないのだから、今さらではあるが。

ともあれ。

いい加減、行動を開始するでしょう。

今いる場所はフィールドのど真ん中だ。当然、戦闘禁止区域など

ではまったくない。つまり、いつモンスターに襲われてもおかしくないということだ。

あまり長々と留まっているわけにはいかない。

俺はゆっくりと立ち上がり、

瞬間、すぐ背後の瓦礫が音を立てて崩れ始めた。

「うおおおうつ!?!」

なんだ、モンスターかつ!?

と俺は、慌てて叫んだ。

「ひゃあああぁっ!?!」

すると、なぜかそれに呼応する声が聞こえる。

声というか、悲鳴というか。

それは甲高い女性の絶叫だった。

「……ん?」

俺は用心のため腰のナイフに手をかけつつ、後ろを振り向く。

そこにいたのは、

「い、痛っ……、転んだ、……ああ、もうイヤ……」

ひとりの、女性プレイヤーだった。

俺はそれを見て一度驚愕し、

すぐさま開いた脳内のフレンドメニューを見て、二度驚いた。

俺はナイフから手を離し、目の前でへたり込んでいる女に向かっ

て声をかける。

「……おまえ、ウラ、か?」

「へ? ……あ、アイリ……?」

「……やっぱりか」

それは。

現実でも友人であり、

付き合いの長い幼馴染みであり、
そしてS o cのプレイ仲間でもある

逆井心夏さかさい しんか アバターネーム“うら”の姿だった。

07 『世界震』（後書き）

用語集

白【属性】

十色の一。プレイヤーの言うところの、特殊系三色。

長期戦に特化した色。一度の戦闘で、使えば使うほど個々のスキルが強化されていく。SP効率もよく、長丁場のボスクエストなどでは重宝される色。

スキルの連続使用回数は、街に戻ったり、エリアの中の回復施設を使ったりするとゼロに戻る。

紫【属性】

十色の一。プレイヤーの言う壁系二色。

全色中で敏捷の伸びが最もいいが、その反面として防御が紙。壁役なのに薄い防御なのは、防ぐのではなく躲すことで攻撃をいなすため。プレイヤースキルが問われる色。

ちなみに憎悪値集めを無視して攻撃特化にする育て方もあり。ツルギはそのタイプ。

突然の邂逅。

生じた驚愕は、しかし目の前で混乱している友人の姿を見ることで、急速に波を引いていく。

「え、……え、ええっ!？」

「落ち着け。とりあえず、ほら、立て」

にわかに恐慌状態に陥った心夏へ、俺は言つて、手を差しのべた。心夏は「あ、うん」と素直にその手を伸ばし、俺の助けを借りて立ち上がった。

普段はそんなに殊勝な奴ではないのだが、さすがに混乱しているらしい。

だがそれは俺も同じだ。今はただ、《目の前で自分より慌てている奴がいると逆に冷静になっていく法則》とでもいうか、そんな感じの精神効果が働いているだけ。

脳内は完全にこんがらがっていた。

……なぜ、心夏がここにいるのだろう。

彼女の名前がオンラインになっていないことは、既にこの目で確認していた。だから、彼女がここにいるはずがないのだ。

それとも、あのオンライン表示は、巻き込まれた人間を示しているわけではなかったのだろうか。

俺はすぐさま脳内の情報画面を呼び起こし、フレンドリストを参照する。

果たして、心夏はオンラインになっていた。

前に見たときとは変わっている。それも、心夏だけじゃない。よく見ると、先程までは二割程度しか点灯していなかったオンライン

を表すマーカーが、今は五割程度までが色を映している。

「……逢理、よね？」

「どういうことかと思案していたところへ、恐る恐るといったように、心夏が声をかけてきた。

「ああ、そうだ。おまえ、何でここにいる？」

「な、なんでって……知らないよそんなこと！ほんと、気づいたらこの場所に立ってて……」

「いつ来た？」

「え、……ついさつき、だけど」

「そうか」

「……ねえ。ここ、どこなの？」

心夏は怪訝な表情でこちらを見上げてくる。

「ともすると、俺が仕掛けたドッキリだとも考えているのではな
かるうか。」

「残念ながらそうではないことを、さて、俺はどのように説明すれば
信じてもらえるのだろう。」

「心夏。落ち着いて聞けよ」

「……なに？」

「実は ここはゲームの中の世界なんだ」

結局。

俺はただ、ありのままを言葉にした。

他にいい説明の方法など見当たらなかった。

「……」

さすがに絶句する心夏。

「そりゃそうだろう。ノリのいい奴なら「いい精神科を紹介するよ」と
言い、そうでなければ肩を竦めて「おまえ、疲れてるんだよ」と
でも休暇を勧められる。いずれにせよ、本気の言葉だとは誰も捉え
ないだろうし、まして事実だと思う人間なんているはずがない。」

「……そうなんだ」
と思っただら、いた。

「いやいや。信じるのかよ」

「なに、嘘なの？」

「や、まあ嘘じゃねえけど。嘘みたいな内容ではあるだろ」

「別に。逢理が嘘ついたら、わたしには判るから。今の逢理は嘘をついてなかった。てことは、少なくとも逢理が騙そうと思って言ったんじゃないでしょ。なら信じるっただけ」

「……あ、そう」

これだから付き合いが長い奴は怖ろしい。

心夏は俺にとつて、ほとんど兄妹のように育ってきた相手だ。そんなことを口に出して言ったことはないし、これからも永久とわに言うつもりはない。まして心夏からすれば、俺のほうが弟であると思っただけだ。

それでも、それだけ近い関係であることは事実だと思う。

「それに。こんな光景、それこそゲームでもなけりゃ、あり得ないっと思うでしょ」

「まあ、……確かにな」

俺は頷いた。

空は暗く、しかし視界は良好。

明るくないのに暗くない。そんな矛盾を孕んだ世界は、周囲の崩壊具合を差し引いたとしても、それだけで現実離れしていると言えた。こんな風景、地球のどこを探したって存在しないだろう。

まるでSF映画にでも出てくる、文明が滅亡した後に残った未来風景のようだった。

恐らくは、ゆえの《廃都》なのだろう。

……そういえばS.O.Cは、地球ではないにしろ、繁栄した人類が

魔物の出現によって衰退し始めた、そんな世界が舞台なんだったかな……。

俺はふと、普段はあまり意識することのない、このゲームの根本に当たる設定を思い返していた。

「……、」
「いや。」

今はそんなことを考えている場合じゃない、か。

「ねえ、逢理。いったい何がどうなって」

「悪いが話しは後だ」

俺は、いくぶん冷静に戻ったらしい心夏の言葉を、遮って言った。今は、心夏の疑問に答えてやれる余裕がない。

「お客様が、いらつしゃったみたいだからな」

気づつたふうに宣いつつも、俺は心夏を背に庇う。

腰の短刀を抜き放つとき、心夏が小さく息を呑むのを後ろに感じた。

俺はそれを意図的に無視し、握つた獲物の切っ先を前方に向けた。

「
」
機械音、とでも言うのか。

擬音で表すなら、ガシャガシャ、とか、ピコピコ、といった感じの音を発しながら、現れたのは三体のモンスターだった。

……いや、それはモンスターと表現するには、些か生物的ではなさすぎる外見だ。

端的に言うなれば、それは、ロボット。

頭と二つの眼球　と思しき赤のライト？　がついていると

ころを見るとヒトガタなのかもしれないが、その脚部はベルトコンベアのようになっている。恐らく、それを回転させることで前へ進

むのだろう。腕になる部分には二本の長いアームが設置されており、邪魔な瓦礫を打ち崩し、振り払うのに使っている。全長も、大人の女性ほどにはあり、あのアームで殴られたらかなり痛いだろうなあ、と、他人事のように少し思った。

「……何、あれ……？」

「さあな。まあ見ての通り、モンスターだろ」

心夏の問いに、俺は何でもないというように、刃物を握っていない左手を軽く振って答えた。

別にはぐらかしたわけじゃなく、それくらいしか答えられなかったのだ。

俺は、このステージに来たのは初めてだ。というか《廃都》ステージに来たのは、恐らくは俺と心夏が、全プレイヤーの中で一番最初だろう。

廃プレイを続ける先頭集団ほどとは言えないが、俺とて正式サービス開始から続けてきた初期プレイヤーだ。けれどその経験の中にこんな機械そのものような敵はいなかった。つまり、弱点も攻撃手段も何もわからない、ということ。一番近いのはゴーレム系だろうが、さすがに見た目からして違いすぎる。参考にはならないだろう。俺は目を細め、敵の情報を脳内で読みとる。

名前：ガードナー。

種族：機械。

レベル 87。

「……やっべ」

強い。あのカマキリやオオカミたちとは、もう比較にもならない。

レベルの差13ならば、こちらに対して十分攻撃が通る。一撃で仕留め切れるとも思えない。

もし俺が一人なら、それでも転移晶石まで凌いで逃げることはできたと思う。

問題なのは

「よお、心夏さん」

「……何よ」

「今、レベルおいくつ？」

「はあ？ レベル？」

「SOCのレベルだよ！ ここはSOCの中なんだ」

「……………。75だけど」

「わお」

だいぶピンチだ。

果たして守りきれぬだろうか。

「つて、果たしても何も無い、か……」

どうあっても、守りきる以外の選択肢などない。

神殿で復活するだなんて、そんな願望に命を賭けるわけにはいかないのだから。

「…………」

ちらり、と心夏の顔を見る。

格好がコスプレみたいになっていることを除けば、背も顔も、現実の心夏のものだった。唯一の違いは、髪の色が若干赤みを帯びていることか。これは心夏が《赤》属性だからだろうか？

それにしても、心夏がこれということは、俺の顔もほぼ現実と同じなのだろう、と今さらのように納得した。

似合わないコスプレでナイフを構えている今の俺は、外から見たら、さぞや滑稽に映ることだろう。そんな想像に、場合も弁えず苦笑が漏れる。

「…………なに笑ってんの？」

「いや、別に」

近づいてくる敵に顔を戻し、俺は誤魔化すように話題を変えた。

「さて　心算。今から俺たちは、あの敵を突破して転移晶石まで戻る必要がある」

「……まあ、そんなことだろうとは思ってたわ」

「察しがよくて何よりだ。だが相手のレベルはどれも80後半ほど。おまえじゃまだ戦うのはキツイだろう」

「どうするの？」

「俺が戦うに決まってる。だから、おまえは何もするなよ。普通にすれば、憎悪値は間違ハズレいなく俺のほうに集まるはずだからな」

「ちよつ、そんなの」

「いいから。無理なんだよ。これはゲームと違う。身体を満足に動かすには、それを相応の慣れがいるんだ。ただボタンを押せばいいゲームとは　違うんだよ」

「っ」

「不満は街に戻ってから聞く。今はただ俺の後ろにいてくれ。頼むから」

「……カツコつけやがって」

「ん、格好ついてたか？　ならよかった」

俺は、あえて不敵に笑ってみせた。

まったく先程から恥ずかしい台詞ばかり吐いている。こんなところ、他の誰にも見られたくはない。

ともあれ、

「っし、　行くぞ！」

「　　っ、　　らあー！」

俺は飛び込み、一番手前の《ガードナー》を、まずはナイフで殴りつけた。

頑ガツ、という硬質な音が響く。
硬い。

脳の端で確認したところによれば、減少した敵HPは三割強といったところだ。

「くそつ、こいつら斬撃はあんま効かないか……!!」
叫ぶ。

反撃が来る前に距離を取るため、俺はガードナーの腹、のような部分を思いつき蹴り飛ばすことでバックステップの反動を得る。攻撃と回避を一体にするその動作で、さらに敵のHPを奪っておく。ゲーム画面からの操作では到底できない、この世界ならではの手段だった。

しかし、
「……っ!!」

その際、アームの回転攻撃が、胸の辺りに僅かに掠った。

思った以上にリーチが長い。

大したダメージじゃない。けれど、テナガザルより不格好な長い腕は、その実かなり厄介な武器になっているようだった。

「……邪魔だな」
まずは腕を落とす、か。

脳内の画面から、とあるスキルを選び出し、発動する。

「……、」

俺は左手の指を二本立て、す、とナイフの刀身をなぞった。灰色の、見ようによっては刃と同じ銀にも見える燐光が、ナイフの周囲を淡く囲い。

灰属性スキル、《シャープグレー鋭利な鈍色》。

一定時間、武器の威力を上昇させる効果を持つ技だ。

「さて」

と、ナイフを構える。

まずは一番近い一体に狙いを定め、俺は地を蹴った。腕関節の細くなっている部分、そこを目掛けてナイフを振るった。ガギツ　という金属同士が触れ合う音が一瞬だけ響き、しかし拮抗はせずアームを断ち切る。

落ちる腕パーツ。一瞬だけ地面に跳ね返るが、すぐに光の粒子となつて消え去つた。

「っし！」

あるいは、接続部が弱点だったのだろうか。ガードナーのHPが、一気にごっそりと減つたことを視認する。スキルの効果だけではないように思えた。

長いアームも、一本になつてしまつては隙が多い。

俺は返す刀で道を薙ぎ、その一撃でガードナーのHPをゼロへ帰した。

「……つたく、これじゃ全然違うゲームだよな……」

光となつて霧散する機械の破片を尻目に、俺はぼやきながら二体目を狙う。

スキルの効果はまだ持続中だ。

切れ味の上昇した短刀は、元々のレベル差もあつてか、やすやすと鉄の身体を持つガードナーを刻んでいく。

二体目をまた光に変えたところで、俺は叫んだ。

「今だ、逃げんぞ心夏！！」

言葉と同時に、瓦礫の影から心夏が飛び出してくる。

目的は、あくまで逃げることであり、戦うことではない。

ツルギたちとの訓練もあつて、俺のSPは、残り五割を切ろうとしていた。来る敵来る敵、全てを相手してはられない。

「走れ！！」

「わかつてるって！！」

声を掛け合いながら遁走する俺と心夏。

その背後で。

三体目が突如、その行動パターンを変えた。

「あ？」

近づいて、殴る。

それだけの攻撃パターンしか持っていないと思われたガードナーが。

突然レーザー撃ってきた。

「痛い、つてか熱いッ!？」

腕に当たった。

HPがべちよつと減少し、反射的にナイフを取り落としてしまう。

「あ、ヤベッ……」

慌てて拾い上げようとしたところへ、

バシユッ!

と。

二発目のレーザーが飛来し、

ナイフが蒸発した。

「……つて嘘やん!？」

耐久度の概念はどこいった!?

てか何だ、その攻撃!! おかしいだろ!?

「ちよっ……、何やってんのアイリ!？」

「知らんわ! てか止まんないから走れ!」

心夏の背を蹴っ飛ばして逃亡を促す。

瓦礫を掻い潜り、ジグザクを心掛けながら必死で逃走する俺と心夏。

走る途中、なんか別の敵にも見つかったりしながら、とにかく必死で奔走する。

そうしながら俺は、頭の中で様々な考えを巡らせていた。

……嘘だ。

何も考えられてない。ただひとつの思考に囚われ、猛烈に混乱していた。

いやいや、ちょっと。

武器、なくなっちゃったんですけど。

……どーすんの……？

08 『心夏』（後書き）

用語集

ガードナー【モンスター】

廃都ステージに登場するロボットのよ様なモンスター。

約75〜90ほどの高レベル帯に登場する。がまあ、その中では弱いほう。

長いアームと、目から出すレーザーで攻撃する。

ちなみに、ナイフが消滅したのは、別にレーザーの特殊効果ではない。詳細はまた、いずれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8753z/>

ソウル・オブ・カラース

2011年12月29日17時51分発行